

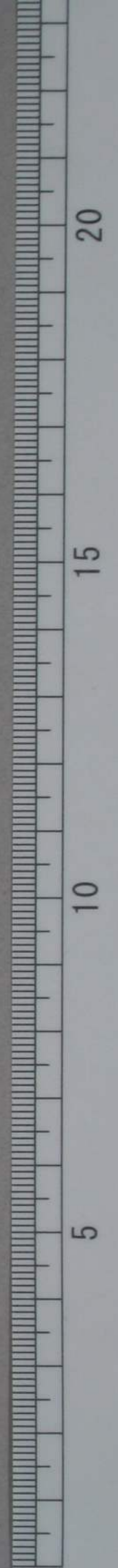
著 空 迢 釋

集 歌 選 自

だひあのまや海

篇五第書叢歌短表代代現
幀裝伯画友恒田森

版 社 造 改



自選
秋集

海やまのあひだ

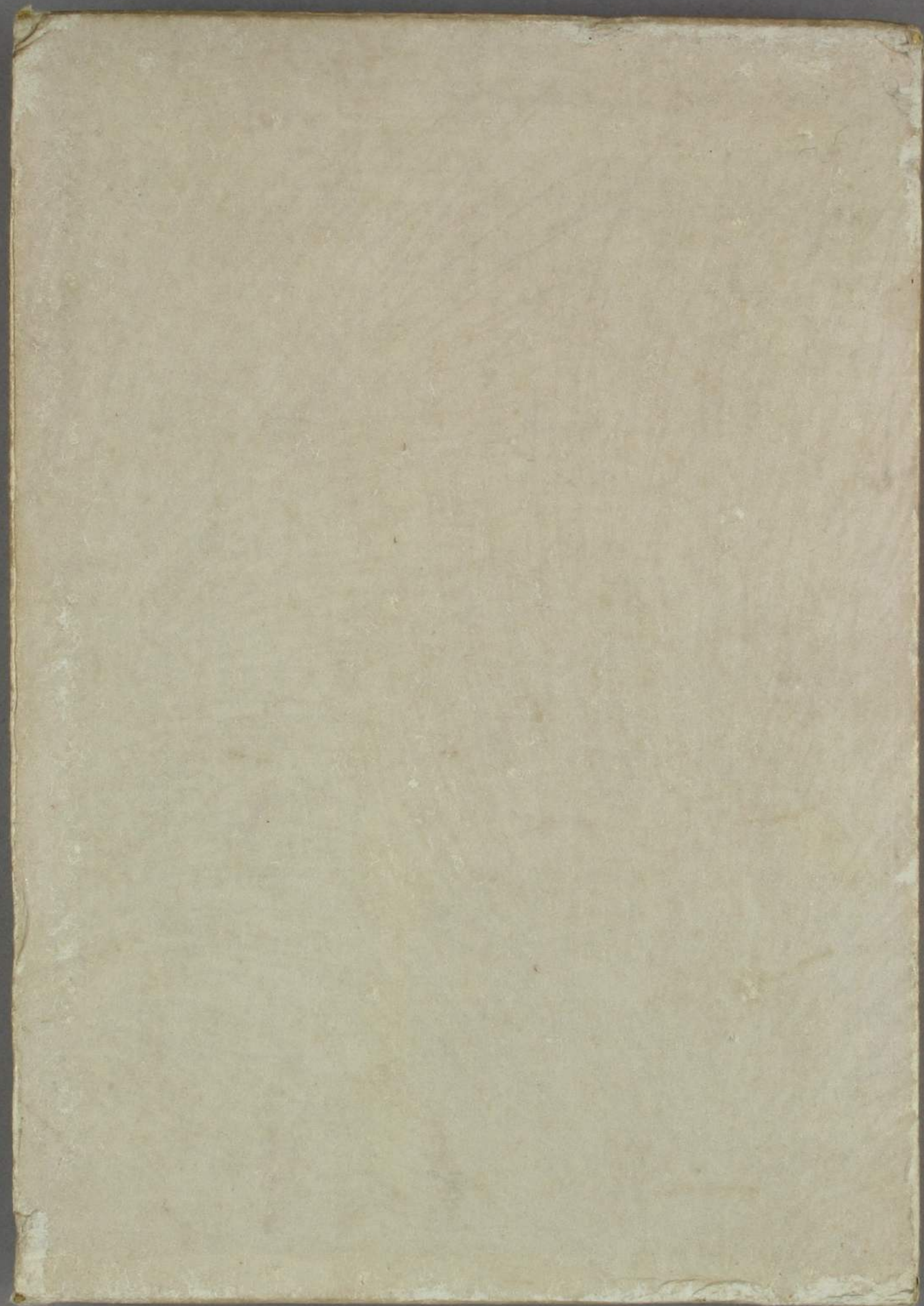
釋

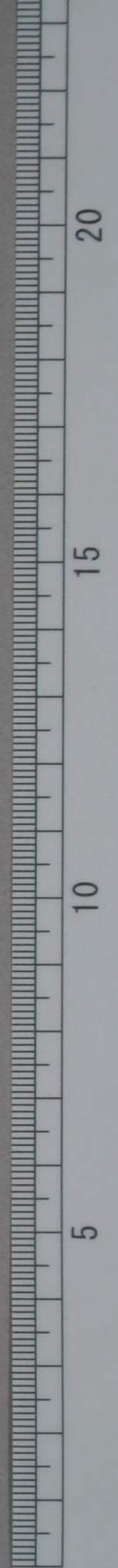
迢

空

著

改造社





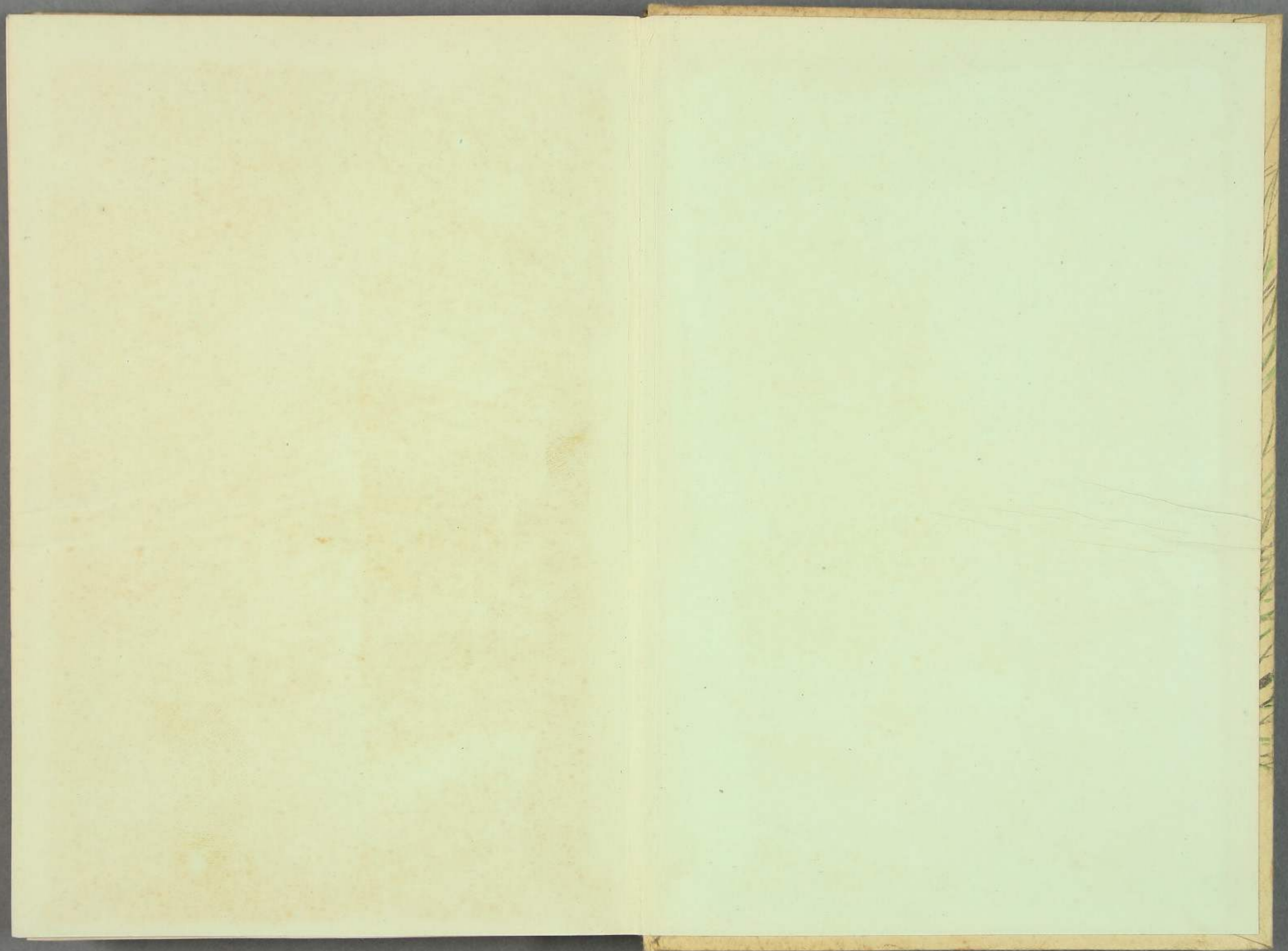
歌 白
集 選

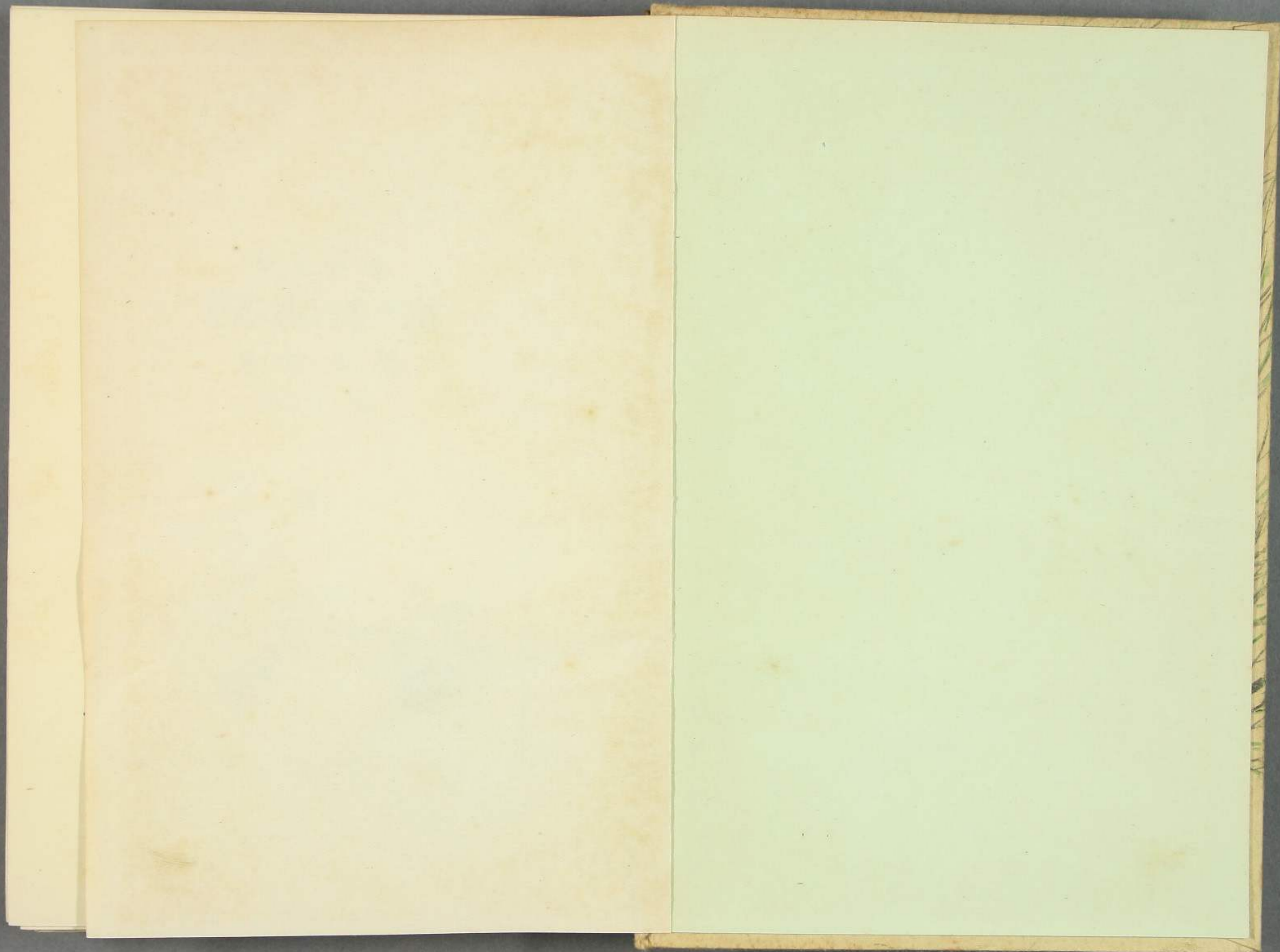
海
や
ま
の
あ
ひ
だ

釋
道
空
著

改 清 社







自 選 歌 集

海まのあひだ

釋 迢 空 著

改 造 社



海やまのあひだ 目次

大正十四年

この集をまづ與へむと思ふ子あるに (一首)……………五

大正十三年

鳥山 (十四首)……………七

登の村 (十三首)……………一一

山 (三首)……………一五

氣多川 (十一首)……………一六

夜 (六首)……………二〇

山住み (五首)……………二三

大正十二年

十二月二十七日 (二首)……………二七

木地屋の家 (十五首) 二八
 供養塔 (五首) 三三
 谷中清水町 (二首) 三五
 静物 (二首) 三六
 風の日 (四首) 三七

大正十一年

遠州奥領家 (八首) 四一
 輕塵 (十一首) 四四
 雪のうへ (二十首) 四七
 夏になりゆく頃 (二首) 五三
 かの二三子に寄す (三首) 五五
 土佐へ歸る人に (一首) 五四

大正十年

をとめの島 (十三首) 五七
 夜 (十三首) 六三
 午後 (一首) 六六
 友よ (七首) 六七

大正九年

大阪 (九首) 七一
 みぞれ (十五首) 七四
 山うら (五首) 七八
 母 (十八首) 八〇

大正八年

霜夜 (七首) 八七
 蒜の葉 (三十八首) 八九
 めひ (五首) 一〇〇

郡上八幡 (七首) 101
 始羅の山 (三十九首) 105
 一周忌 (二首) 115
 冬木原 (十一首) 116
 枯山 (四首) 119
 春 嶺 (一首) 120
 正月、橋平に寄す (六首) 121
 朝山 (七首) 123

大正七年

金富町 (五首) 127
 お花 (三首) 128
 村の子 (二首) 130
 雪 (五首) 131

堀の内 (一首) 133
 端山 (九首) 133
 大つごもり (六首) 136
 除夜 (十八首) 138
 だうろく神まつり (七首) 143

大正六年

霜 (十一首) 147
 山および海 (七首) 150
 熊野 (四首) 153
 濱名 (二首) 153
 夾竹桃 (八首) 154
 ある生徒 (一首) 156
 左千夫翁五年忌 (七首) 157

夏相聞 (七首) 一五九

鐵仰庵 (十八首) 一六二

朝の森暮の森 (六首) 一六六

野あるき (二十三首) 一六八

いろものせき (七首) 一七五

清志に與へたる (四首) 一七七

校正室 (二首) 一七八

新橋停車場 (五首) 一七九

大正五年

火口原 (十一首) 一八三

森の二時間 (六首) 一八六

初七日 (六首) 一八八

いろは館 (二首) 一九〇

大正四年以前明治四十四年まで

おほとしの日 (五首) 一九三

左千夫翁三周忌 (四首) 一九四

菟 道 (七首) 一九六

錢 (四首) 一九八

三矢五郎氏を悼む (三首) 一九九

家びとの消息來て (一首) 二〇〇

我孫子 (五首) 二〇〇

大秦寺 (五首) 二〇一

鹽 原 (六首) 二〇四

生 徒 (二十一首) 二〇五

阿蘇を越えて (三首) 二一一

奥熊野 (二十三首) 二二三

明治四十三年以前三十七年頃まで

焚きあまし 一 (二十三首)……………三十一

おなじく 二 (五十二首)……………三十七

この集のすゑに……………三十四

大正十四年 —— 一首 ——

この集を、まづ興へむと思ふ子
あるに、

かの子らや われに知られぬ妻とりて、生き
のひそけさに わびつゝをぬむ

大正十三年
——五十二首——

島 山

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山
道を行きし人あり

谷々に、家居ちりぼひ ひそけさよ。山の木の
間に息づく。われは

山岸に、晝を 地^チ蟲の鳴き満ちて、このしづけ
さに 身はつかれたり

山の際マの空ひた曇る さびしさよ。四方のコ木む
らは 音たえにけり

この島に、われを見知れる人はあらず。 やすし
と思ふあゆみの さびしさ

わがあとに 歩みゆるべすつゞき來る子にも
言へば、 恥ちてこたへず

ひとりある心ゆるびに、 島山のさやけきに向き
て、 息つきにけり

ゆき行きて、 ひそけさあまる山路かな。 ひとり
ごゝろは もの言ひにけり

もの言はぬ日かさなれり。 稀に言ふことばつた
なく 足らふ心

いきどほる心すべなし。 手にすゑて、 蟹のはさ
みを もぎはなちたり

澤の道に、 こゝだ逃げ散る蟹のむれ 踏みつぶ
しつゝ、 心むなしもよ

いまだ わがものにさびしむさがやまず。沖
の小島にひとり遊びて

蟹の家 隣りすくなみあひむつみ、湯をたてに
けり。荒磯アサのうへに

ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の
雛の親鳥は、くびられにけむ

鶏の子の ひろき屋庭に出でゐるが、夕焼けど
きを過ぎて さびしも

蟹の村

網アビ曳ヒきする村を見おろす阪のうへにぎはしく
して、さびしくありけり

磯村へますぐにさがる 山みちに、心ひもじく
波の色を見つ

すこやかに網アビ曳ヒきはたらく蟹の子に、言はむこ
とばもなきが さぶしさ

蟹をのこ あびき張る脚すね長に、あかき禪（高）
く、ゆひ固めたり

あわびとる蟹のをとこの赤きへこ 目にしむ色
か。浪がくれつゝ

蟹の子のかづき苦しき 吐ける息を、旅にし聞
けば、かそけくありけり

行きずりの旅と、われ思ふ。蟹びとの素肌のに
ほひ まさびしくあり

赤ふどしのまあたらしさよ。わかければ、この
蟹の子も、ものを思へり

蟹の子や あかきそびらの盛り肉（肉）の、もり膨れ
つゝ、舟漕ぎにけり

あちきなく 旅やつゞけむ。蟹が子の心生きつ
ゝはたらく 見れば

蟹をのこのふるまひ見れば さびしさよ。脛長
々と 砂のうへに居り

船べりに浮きて息づく 蟹が子の青き腫は、わ
れを見にけり

蟹の子のむれにまじりて経なむと思ふ はかな
ごころを 叱り居にけり

山

若松のみどりいきるゝ山はらに、わが足おとの
いともかそけさ

目のかぎり 若松山の日のさかり 遠峰トホミネの間の
空のまさ青アヲさ

田向ひに、黒檜ビたち繁シむ山の崎 ゆたになだれ
て、雨あるに似たり

氣多川

きはまりて ものさびしき時すぎて、 麥うらし
ひとつ鳴き出でにけり

麥うらしの聲 ひさしくなきつげり。 ひとつと
ころの、 をぐらくなれり

むぎうらし ひとつ鳴き居し聲たえて、 ふたゝ
びは鳴かず。 山の寂けさ

ふるき人 みなから我をそむきけむ 身のさび
しさよ。 むぎうらし鳴く

麥うらしは、 早蟬。 鳴いて、 麥にみを
入れる、 と言ふ考へからの名。

山中ナカに今日はあひたる 唯ひとりのをみな や
つれて居たりけるかも

にぎはしく 人住みにけり。 はるかなる木むら
の中ゆ 人わらふ聲

これの世は、さびしきかもよ。奥山も、ひとり
人住む家は、さねなし

氣多川のさやけき見れば、をち方のかじかの聲
は、しづけかりけり

ひるがほのいまださびしきいろひかも。朝の間
と思ふ日は、照りみてり

あさ茅原チガハ つばな輝く日の光り、まほにし見れ
ば、風そよぎけり

家裏に、鳴きつゝうつる鶏の聲。茅の家壁チガハを風
とほり吹く

夜

啼き倦みて 聲やめぬらし。 鴉の止とへる木は、
おぼろになれり

山の霧いや明りつゝ 鴉の 唯ひと聲は、 大き
かりけり

鴉棲カる梢 わかれすなりにけり。 山の夜霧はあ
かるけれども

さ夜ふけと 風はおだやむ。 麓べの澤のかや原
そよぎつゝ聞ゆ

山中ナカは 月のおも昏クくなりナりにけり。 四方のいき
もの 絶えにけらしも

山深きあかとき闇や。 火をすりて、 片時見えし
わが立ち處トかも

山住み

夕かげのあかりにうかぶ土の色。ほのかに
霧は這ひにけるかも

ほのくくと道はをぐらし。土ぼこり踏みしづ
めつゝわれは來にけり

青々と山の梢のまだ昏れず。遠きこだまは、
岩たゞくらし

はたごの土間に餌をかふつばくらめの
聲ひそけさや。人おとはせず

をとめ一人まびろき土間に立つならし。くら
き聲にて、宿せむと言ふ

大正十二年 — 三十首 —

十二月二十七日

あまつ日のみ冬來向ふ色さびし。わが大君は
ものを思へり

霜月の日よりなごみのあまりにも寂けき空
のしたおぼしきも

木地屋の家

うちわたす　大茅原となりにけり。茅の葉光る
暑き風かも

鳥の聲　遙かなるかも。山腹ヤマウらの午後の日ざしは、
旅を倦ましむ

高く来て、音なき霧のうごき見つ。木むらにひ
とく　われのしはぶき

簷ス深き山澤遠き見おろしに、轆轤音して、家ち
ひさくあり

澤なかの木地屋キヂヤの家にゆくわれの　ひそけき歩
みは　誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびし
さを　われに聞かせつ

2)

夏やけの苗木の杉の、あかくくと　つゞく峰ツツクミの
上ウヘゆ　わがくだり來つ

山びとは、轆轤ひきつゝあやします。わがつく
息の大きと息を

誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそけき
家に、山びとゝをり

澤蟹をもてあそぶ子に 錢くれて、赤きたなそ
こを 我は見にけり

わらはべのひとり遊びや。日の昏るゝ澤のたぎ
ちに、うつゝなくあり

友なしに 遊べる子かも。うち對ふ 山も 父
母も、みなもだしたり

戻るとき、よびとめて手にくれたのは、
木ほつこであつた。木地屋でなくては
つくりさうもない、如何にもてづいな、
親しみのある、童子ゴッコといふ名のふさは
しい人形である。

木ほつこの目鼻を見れば、けうとさよ。すべな
き時に、わが笑ひたり

山道に しばくたゝずむ。目にとめて見らく
さびしき木ぼつこの顔



山峽カセの激タギちの波のほの明り われを呼ぶ人の聲
を聞けり

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音
の石塔婆の立つてゐるのは、あはれで
ある。又殆、峠毎に、旅死ツツにの墓があ
る。中には、業病の姿を家から隠して、
死ぬるまでの旅に出た人のなどもある。

人も 馬も 道ゆきつかれ死にけり。旅寝か
さなるほどのかそけさ

道に死ぬる馬は、佛となりにけり。行きとどま
らむ旅ならなくに

邑山ウツヤマの松の木キむらに、日はあたり ひそけきか
もよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきは
に、言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふるゝ生き物のかそけき墓
は、草つゝみたり

谷中清水町

家ごとを處女にあづけ、年深く二階に居れば
もの音もなし

水桶につけたるまゝの菊のたば 夜ふかく見れ
ば、水あげにけり

静物

紫陽花の　まだとゝのはぬうてなに、花の紫は
色立ちにけり

あぢさゐの蕾ほぐれず　粒だちて、うてなの上
に　みち充ちにけり

風の日

さるとりの若き芽生ひの、ひたぶるに　なよめ
くものを　刺^へたちちにけり

さるとりの鬚しなやかに濡れにけり。露はつば
らに、こまやかにして

うすみどり　まだやはらかに、つゞらの葉。つ
やめく赤^{アキ}に筋とほりたり

たえまなく 梢ツレすく風に日かけ洩り、はげしき
ものか。下草のかをり

大正十一年 — 四十五首 —

大正十一年

遠州 奥領家

山ぐちの櫻昏れつゝ、ほの白き道の空には、
鳴く鳥も棲す

燈とともさぬ村を行きたり。山かけの道のあかり
は、月あるらしも

41
道なかは、もの音もなし。湯を立つる柴木のけ
ぶり、にほひ充ちつゝ

山深く こもりて響く風のおと。夜の久しさを
堪へなむと思ふ

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだ
り来る心はなごめり

ほがらなる心の人にあひにけり。うやくしさを
の息をつきたり

山なかに、^{イキナホ}悸りつゝ、はかなさよ。遂げむ世知
らず ひとりをもれば

山深く われは來にけり。山深き木々のとよみ
は、音やみにけり

輕塵

人ごとのあわたゞしさよ。 岡チマダより立ちうつり行く
ほこりさびしも

庭土に、櫻の蓋のはらゝなり。 日なか さびし
きあらしのとよみ

もの言ひの いきどほろしき隣びとの家うごく
もよ。 あらしに見れば

春のあらし 静まる町の足アの音を 心したしく
聞きにけるかも

春の夜の町音聴けば、 人ごとに むつましげな
るもの言ひにけり

心ひく言をきかずなりにけり。 うとくしきは、
すべなきものぞ

ひとりのみ憤りけり。 ほがらかに、 あへばすな
はち もの言ふ人

人の言ふことばを聞けば、山川のおもかげたち
來ること多くなれり

人來ればさびしかりけり。かならず我をた
ばかるもの言ひにけり

ほがらに心たもたむ。人みなはかなきこと
を言ひに來にけり

かたくなにまもるひとりを堪へさせよ。さび
しき心遂げむと思ふに

雪のうへ

雨のうちに雪ふりにけり。雪のうへに杳あ
とつくる我はひとりを

十年あまり七とせを経つ。たもち難くなり來る
心のさびしくありけり

新しき年のはじめの春駒のをどりさびしもよ。
年さかりたり

道なかに、明りさしたる家稀に、起きてもの言
ふ聲の静けさ

町中ナカに、鶏鳴きにけり。空際ソラのあかりまされる
は、夜深かるらし

犬の子の鳴き寄る聲の 死にやすき生きのをに
思ふ戀ひは、さびしも

遂げがたき心なりけり。ありさりて、空しとぞ
思ふ。雪のうは解け

軒ごもりに 秋の地蟲チムシの聲ならで、つたはり來
るは、人ヒト解トくらし

うるはしき子の 遊びとよもす家のうちに、心
やすけき人となりぬらむ

直面ヒタオモテに たゞひ満ちたる暗き水。思ひ堪へなむ。
ひとりなる心に

水の面オモの暗きうねりの上あかり はるけき人は、
我を死なしめむ

水のおもの深きうねりの ゆくりなく目を過ぎぬらし。遠びとのかげ

闇夜の 雲のうごきの静かなる 水のおもてを堪へて見にけり

みぎはに、芥焼く人居たりけり。静けき夜らを

戀ひにけるかも

川みづの夜はの明りに うかびたる木群コタラのうれは、揺れ居るらしも

くら闇に、そよぎ親しきものゝ音。水蘆むらは、そがひなりけり

遠ぞく夜風の音や。いやさかる思ひすべなく雨こぼるめり

父母の庭の訓へにそむかねば、心まさびしき二十年を経つ

川波の白く、だくる橋柱の あらはれ來つゝ人は還らめや

あかり来る橋場の水に、あかときのあわ雪ふり
て、消えにけるかも

夏になりゆく頃

春山の青葉たけつゝつやめける 日となりなが
ら、晝のさびしさ

はやち吹く 竝み木の原は、なきみてる蟬より
ほかの聲 たゝずけり

かの二三子に寄す

この日ごろ ことばけはしくなりたりけり。さ
びしき心 人を叱るも

若き人の怠りくらす心はさびし。いましめ易き
ことにあらず その一

うつそみの人はさびしも。すさのをぞ 怒りつ
ゝ 國は成しけこものを その二

土佐へ歸る人に

洋ヨウなかに おだやむ風や。目をあきて、親のい
まはの息の音 きけり

大正十年 — 三十四首 —

をとめの島

—琉球—

朝やけのあかりしづまり、ほの暗し。夏ぐれけ
ふる 島の藪原

「なつぐれ」は、ゆふだちの方言

57

諸づるのすがるゝ砂は けぶりたち、洋ソマの朝風
島を吹き越ゆ

洋^{ワタ}なかの島に越え來て ひそかなり。この島人は、知らずやあらむ

地べたから十歩二十歩、深いのになると、四五十歩もおりねばならぬ水汲み場さへ、稀ではない。降り井^{カアア}・穴井^{カア}など、方言では言ふ。

をとめ居て、ことばあらしふ聲すなり。穴井^{アナキ}の底のくらしき水影^{ミヅカゲ}

處女のかぐろき髪を あはれと思ふ。穴井の底ゆ、水汲みのぼる

島の井に 水を戴くをとめのころも。その襟細き胸は濡れたり

鳴く鳥の聲 いちじるくかはりたり。沖繩じまに、我は居りと思ふ

あまたゐる山羊みな鳴きて 喧^{カマヒス}しきが、ひた寂しもよ。島人の宿に

島をみなもの、戻りしあとの静けさや。縁のあかりに、しりのかたつけり

かべ茅ゆ洩れゆく煙　ひとりなる心をたもつ。
ゆふべ久しく

壁は、茅の葺きおろしである。内地の古語のまゝえつりと言うてゐる。

目さめつゝ聴けば、さびしも。壁茅のさやぎはいまだ夜ぶかくありけり

人の住むところは見えす。荒濱に向きてすわれり。剝り舟二つ

糸満の家むらに來れば、人はなし。家五つありて、山羊一つなけり

糸満。糸満人を、方言風の言ひ方で、かう言ふ。糸満の町から、一軒二軒五六軒、出れふに來る。寂しい磯ばた島かげなどに小屋がけして、時を定めて來ては歸る。一年中の大方は、そこで暮してゐる。

夜

下伊那の奥、矢矧川の峽野に、海と言ふ在所がある。家三軒、皆、縣道に向いて居る。中に、一人の翁がある。何時頃からか狂ひ出して、夜でも晝でも、河原に出てゐる。色々の形の石を拾うて來ては、此小名の兩境に並べて置く。其一つひとつに、知つた限りの聖衆の姿を、觀じて居るのだと聞いた。どれ

を何佛・何大士と思ひ辨つことの出来るのは、其翁ばかりである。

ながき夜の　ねむりの後も、　なほ夜なる　月おし照れり。　河原菅原

川原の栲アヲチの隈の繁シみくくに、　夜ごゑの鳥は、い寝あぐむらし

川原田に住みつゝ曇る月の色　稻の花ガ香の、よどみたるかも

かの見ゆる丘根の麓原 ひとくたりに、さ夜風
 おだやむ 月夜のひゞき

をちかたに、水霧ひ照る湍のあかり 龍女のか
 げ 群れつゝをどる

光る湍の 其處につどはす三世の佛 まじらひ
 がたき現身。われは

ひたぶるに月夜おし照る河原かも。立たすは
 薬師。坐るは 釋迦文尼

湍を過ぎて、淵によどめる波のおも。かそけき
 音も なくなりにけり

時ありて 渦波おこる淵のおも。何おともなき
 そのめぐりはも

うづ波のもなか 穿けたり。見るくくに 青蓮
 華のはな 咲き出づらし

水底に、うつそみの面わ 沈透き見ゆ。來む世
 も、 我の 寂しくあらむ

川霧にもろ枝翳したる合歡ネムのうれ 生きてうご
めく ものゝけはひあり

合歡の葉の深きねむりは見えねども、うつそみ
愛ヲしき その香たち來も

午 後

霜凍イての、ぬくもり解くる西おもては、夕かけ
すでに もよほしにけり (飯田町國學院の庭)

友 よ

目ふたぎて いまだは睡ネねど、しづごゝろ 怒
りに堪ふる思ひになり來ク

たはやすく 人の言をまことあるものとし憑む。
さびしき我がさが

鐵瓶の 鳴り細りゆくゝら闇の 煥オキ火のいろに、
念ひ凝すも

面^{オモ}むかへば、たゞちに信じ、ひたぶるに心をゆるすすべなきわがさが

とまりゆく音と聞きつゝ、目に見えぬ時計のおもてに、ひた向ひ居り

いきどほる心おちつくすべなさや。門弟子ひとり 今宵とめたり

もろともに 若きうれひはとひしかど、人の悔しき年にはなりつ

大正九年 — 四十九首 —

大 阪

風吹きて 岸に飄蕩^{カヒロ}ぐ舟のうちに、魚を焼かせ
て 待ちてわが居り

川風にきしめく舟にあがる波。きえて 復^{マタ}來る
小き鳥 ひとつ

ハ
はやりかぜに、死ぬる人多き町に歸り、家を
日かず 久しくなりぬ

ふるさとの町を　いとふと思はねば、人に知ら
れぬ思ひの　かそけさ

ふるさとはさびしかりけり。いさかへる子らの
言も、我に似にけり

をりくりに　しいづる我のあやまちを、笑ふこ
となる　家はさびしも

久しくはとまらぬ家に、つゝましく　人ことわ
りて、こもる日つゞく

兄の子の遊ぶを見れば、圓くゐて　阿波のおつ
るの話せりけり

いわけなき我を見知りし町びとの、今はおほよ
そは、亡くなりけり

みぞれ

よろこびて さびしくなれり。庭松に 雲のそ
ゝぐ時うつりつゝ

國さかり この二十年を見ざりけり。目を見あ
ひつゝあるは すべなし

をぢなきわらはべにて 我がありしかば、我を
愛しと言ひし人はも

つぶぐに かたらひ居りて飽かなくに、年深
き町のとゞろき聞ゆ

若き時 旅路にありしものがたり 忘れずあり
けり。われも わが友も

過ぎにし年をかたらへば、はかなさよ。牀の黄
菊の 現しくもあらず

酒たしむ人になりたる友の顔 いまだわかみと
言に出でゝほめつ

宵あさく 雲あがりし闇のそら なほ雪あると
仰ぎけるかも

あはずありし時の思ひあり。 夜の街 小路のあ
かり、大路にとゞく

雨のうち あかりとぼしきぬかり道に、 心たゆ
みのしるきをおぼゆ

星満ちて 霜氣霽れたる空濶し。 値ひがたき世
にあふこともあらむ

行きとほる 家並みのほかげ明ければ、 人いり
こぞる家 多く見ゆ

夜の町に、 室の花うるわらはべの その手かじ
けて、 花たばね居り

道なかに 花賣れりけり。 別れ來し心つゝしみ
に 花もとめたり

過ぐる日は、 はるけきかもと 言ひしかば、 人
はすなはち はるけくなりつ

山うら

御柱海道 凍てゝ真直なり。かじけつゝ 鶏は
かたまりて居る

うちわたす 大泉 小泉 山なほ見え、刈り田
の面は、昏くなりたり

その山かげには、赤彦さんの生家がある。

八ヶ嶺の その山竝みに、蓼科の山の腹黄なり。
霧霽れ来れば

八ヶ嶽の山うらに吸ふ朝の汁 さびしみにけり。
魚のかをりを

諏訪びとは、建御名方の後といへど、心穩ひの
あしくもあらず

母

この心 悔ゆとか言はも。 ひとりの おやをか
そけく 死なせたるかも

かみそりの 鋭刃トバの 動きに おどろけど、 目つぶ
りがたし。 母を 剃りつゝ

あわたゞしく 母がむくろをはふり去る心とも
なし。 夜はの霜ふみ

見おろせば、 膿涌ウミきに ぐるさかひ川 この里い
でぬ母が世なりし

まれくは、 土におちつくあわ雪の 消えつゝ
庭のまねく濡れたり

苔つかぬ庭のすゑ石 面オモかわき、 雨あがりつゝ
晝の久しさ

古庭と荒れゆくつぼも ほからかに、 晝のみ空
ゆ 煙さがるも

町なかの煤ふる庭は、ふきの蓋たちよこれつゝ
土からび居り

庭の木の立ち枯れ見れば、白じろと 幹にあま
りて、蟲むれとべり

二七日カ 近づきにけり。家深く 藏に出で入る
土戸のひゞき

家ふえてまれにのみ來る鶯の、かれ 鳴き居り
と、兄の言ひつゝ

静けさは 常としもなし。店とほく、とほりて
響く ぜに函の音

さびしさに馴れつゝ住めば、兄の子のとよもす
家を 旅とし思ふ

はらかなのかくむ火桶に唇かわき、言にあまれ
る心はたらへり

顔ゑみて その言しふる弟の こゝろしたしみ
は、我よく知れり

たまくは 出でつゝ間ある兄の留守 待つに
しもあらず 親しみて居り

若げなるおもわは、今は とゝのほり、叔母の
みことの 母さびいます

遠くより 歸りあつまるはらからに、事をへむ
日かず いくらも残らず

大正八年 — 百二十七首 —

霜 夜

竹山に 古葉おちつくおと聞ゆ。 霜夜のふけに、
覺めつゝ居れば

わがせどに 立ち繁む竹の梢冷ゆる 天の霜夜
と 目を瞑りをり

とまり行く音と聞きつゝ さ夜ふかき時計のお
もてを 寝て仰ぎ居り

枕べのくりやの障子　あかりたり。　疊をうちて、
鼠をしかる

ひき牕のがらすにあたる風のおと　霜の白みは、
夜あけかと思ふ

くりや戸のがらすにうつる　こすもすの夜目の
そよぎは、明け近からし

息さしの　土に觸りたる外のけはひ　誰かい寝
らし。わが軒のうちに

蒜の葉

叱ることありて後

薩摩より、汝がふみ來^キ到^ダる。　ふみの上に、涙お
として喜ぶ。われは

蒜の葉

雪間にかゞふ蒜ニギの葉 若ければ、我にそむきて
行く心はも

おのづから 歩みとゞまる。雪のうへに なげ
く心を、汝ナは 知らざらむ

朝風に、粉雪けぶれるひとたひら 會津の櫻
固くふゝめり

雪のこる會津の澤に、赤きもの 根延ハふ野檀シは、
かたまり咲けり

踏みわたる山高原ヤマカハの斑ハれ雪 心さびしも。ひと
りし行けり

會津嶺ノに ふりさけゝぶる雪おろしを 見つゝ
呆ホれたる心とつげむ

榛ハシの木の若芽つやめく晝の道。ほとく 心く
づほれ来る

屋の上は、霜ふかゝらむ。會津の山 思ひたへ
居り。夜はの湯槽に

鹿兒島

島山のうへに　ひろがる笠雲あり。日の後の空
は、底あかりして

ゑまひのにほひ　なほいわけなき子を見まく
筑紫には來つ。心たゆむな

憎みつゝ來し汝がうなじに　骨いでゝ　瘦せた
る後姿見むと思へや

うなだれて、汝はあゆめり　渚の道。憎しと思
ふ心にあらず

憎みがたき心はさびし。島山の緑かげろふ時を
經につゝ

汝が心そむけるを知る。山路ゆき　いきどほろ
しくして、もの言ひがたし

叱りつゝ　もの言ふ夜はの牀のうちに、こたへ
せぬ子を　あやぶみにけり

庭草に、やみてはふりつぐつゆの雨　心怒りの
たゆみ來にけり

わが黙^{モク}す心を知れり。燈のしたに　ひたうつむ
きて、身じろかぬ汝^ニは

度^ツましきしゞまに　對^カふ汝がうなじに、一つゐ
る蚊を、わが知りて居り

ころび聲　まさしきものか。わが聲なり。怒ら
じとする心は　おどろく

燈のしたに、怖^オぢかしこまる汝^ナが肩を　瘦せた
りと思ひ、心さびしも

からくして　面^{オモテ}を起す　汝の頬　白くかわきて
胸はかりがたし

一言を言ひ疏^トくとせぬ汝の顔　まさに瞻^モりつゝ
あやぶみにけり

言に出でゝ言はゞゆゝしみ、搏^イ動^ドる胸を堪へつゝ
ゝ常の言いへり

待ちがたく 心はさだまる。庭冷えて 露くだ
る夜となりけるかも

さ夜深く 風吹き起れり。待ち明す 心ともあ
らず。大路のうへに

額ヌカのうへに くらくそよげる城山の 梢を見れ
ば、夜はさかりなり

篠垣ノエの夜深きそよぎ 道側ミチノヘに、立ちまどろめる
心倦みつゝ

はるけき 辻ゆ來向ふ車の燈 音なきはしりを
瞻アサヒる夜はふけぬ

をちこちの家に、ま遠に うつ時計。大路の夜
の くだつを知れり

夜なか迄 家には來ずて、わが目避アサヒく汝がある
きを 思ひ苦しも

寄物陳思

尾張^ヲ少^シ昨^ノのぼらず。年満ちて、きのふも 今日
も、人續^ツぎて上る

つくしの遊^ウ行^カ嬢^レ子^トになづみつゝ、旅^タ人^{ヒト}は 竟^ツに
還^マりたりけり

よき司 われは持^モたらぬ憶良ゆゑ、汝がゐやま
ひは、受け得^エずなりたり

かの少昨の爲に

國遠く、我におちつゝ、汝が住みてありと思ふ
時 悔いにけるかも

何ごとも、完^マにをはりぬ。息づきて 全^マく霽^ハけ
む心ともがな

寛^{ユル}恕^シなき我ならめや。汝を瞻るに、心ほとく
息づくころぞ

庭の木の古葉掃きつゝ、待ちごゝろ失せにし今
を 安しと思はむ

め
ひ

私の姉なるその母と、十一二の頃から、
私の生家に来てゐた女姪福井富美子は、
去年女學校もすまして、今年十九にな
つてゐたのであつた。

わが家のひとり處女の、
常^{ツネモダ}黙^{モダ}すさびしきさがを
叱りけり。わが

をとめはも。肩の太りのおもりに、情^ヨづかす
見えし。その後姿^{ウシロ}はも

われの家にをとめとなりて、
糾^ツね^ネ髪 たけなる
ものを 死なせつるかも

茨^{マム}田^ダ野の水涌き濁る塚原を、
處女の家と 思ひ
堪へめや

あきらめてをり と告げ来る 汝が母のすくな
きことばよ、人を哭かしむ

郡上八幡

八月末、長柄川の川上、郡上グンシャウの町に入る。
この十二日の晝火事で、目抜きメヌキの街々、
家千二百軒が焼けてゐた。

焼け原の町のもなかを行く水の
せゝらき澄み
て、秋近づけり

ゆくりなき旅のひと日に、見てあるけり。家亡
びたる 山の町どころ
町びとは、いまだ愕くことやまず 家建ていそ
げり。焼け原の土に
焼け原の町の庭木は、幹焦げて 立ちさびしも
よ。山風吹くに
夕されば、丘根チネ吹きくだる山嵐の青葉 散りわ
たる。焼け土の原

青山の山ふところにほこり立ち、夕日かすめり。
 焼け原のうへ

山の際マにほこりたなびき うらがなし。夕日あ
 らはに、町どころ見ゆ

始羅の山

もの言ひて さびしさ残り。大野らに、行き
 あひし人 遙へんけくなりたり

はろくに 埃をあぐる晝の道。ひとり目つぶ
 る。草むらに向きて

遂ナげがたく 心は思モへど、夏山のいきれの道に、
 歎ナ息キしまさる

言^{コト}たえて 久しくなりぬ。 始^{ハジ}羅^ラの山 喘^アへつゝ
越^コゆと 知^チらずやあらむ

日の照りの おとろへそむる野の土の あつき
乾^カきを 草鞋^{コウジ}にふむも

火の峰の山ふところの 寝^ネて居^イりと思^{オモ}ふこゝろ
は おどろかめやも

木々とよむ雨のなかより 鳥^{トリ}の聲^{コエ} けたゝまし
くして、やみにけるかも

兒湯^{イユ}の山 棚田^{テノ}の奥^{ウチ}に、 妹^{イモ}と 夫^セと 飯^イはむ家
を 我^ワは見^ミにけり

つばらに さゝ波^{ナミ}光^ヒる 赤^{アカ}江^カ灘^ナ。 この峰^{ミネ}のうへゆ
見^ミ窮^{キウ}めがたし

海風^{ウミカゼ}の吹^フき頻^シく丘^{ヒラ}の砂^{スナ}の窪^{フナ}。 散^チりたま^マる葉^ハは、
すべて青^{アヲ}き葉

木^キのもとの仰^{ウツ}ぎに 疎^スき枝^エのうれ。 朝^{アサ}間^マの空^{ソラ}は、
色^{イロ}かはり易^{ヨク}し

朝日照る川のま上のひと在所。臺地の麥原ムギノ刈りいそぐ見ゆ

夏やまの朝のいきれに、たどぐし。人の命を愛アハしますあられめや

緑葉のかゞやく森を前に置きて、ひたすらとあるくひとりぞ。われは

焼き畑のくろの立ち木の夕目には、寂しくゆらぐ。赤き緒の笠

兒湯コユの川 長橋わたる。川の面オモに、揺れつゝ光る さゞれ波かも

森深き朝の曇りを あゆみ來て、しるくし見つも。藤のさがりを

青空になびかふ雲の はろぐし。ひとりあゆめる道に つまづく

山原の茅原チに しをるゝ晝顔の花。見過しがたく 我ゆきつかる

裾野原 野の上に遠き人の行き いつまでも見
えて、かげろふ日の面オモ

諸縣モリノの山にすぐなる柚の道。疑はなくに 日は
夕づけり

山下ヤマノに、屋庭まひろきひと構へ。道はおりたり。
その夕庭に

山の子は、後姿ウシロさびしも。風呂たきて、手拭白
く かづきたりけり

この家の人の ゆふげにまじりつゝ、もの言ひ
ことなる我と思へり

旅ごゝろのおどろき易きを叱りつゝ、柴火のく
づれ 立てなほし居り

日のうちを いきれ残り。茶臼原チウスの夏うぐひ
すは、草ごもり鳴く

こすもすの蕾かたきに、手觸りたり。旅をやめ
なむ 心を持ちて

谷風に 花のみだれのほのぐし。 青野の権
山の邊に散る

焼けはらの石ふみわたるわがうへに、 山の夕雲
ひくゝ垂れ來も

ゆふだちの雨みだれ來る茅原ゆ、むかつ丘かけ
て 道見えわたる

野のをちを つらなりとほる馬のあし つばら
に動く。夕雲の下シタに

幹だちのおぼめく木々に、 ゆふべの雨 さやぐ
を聞きて、とまりに急ぐ

麥かちて 人らいこへる庭なかの 榎のうれに、
鳥あまた動く

庭の木に、 ひまなくうごく鳥のあたま 見つゝ
遠ゆくことを忘れ居り

竝み木原、車井のあと をちこち見ゆ。 國は古
國。 家居さだまらず

峰^ナの上の町 家竝みに人のうごき見ゆ。山高く
して、雲行きはやし

道のうへにかぐるくそゝる高山の 山の端あか
り 居る雲の見ゆ

窓のしたに、海道^{カイダウ}ひろく見えわたり、さ夜の旋^ツ
風に 土けぶり立つ

山岸の葛葉のさがり つらくに、仰ぎつゝ來
し。この道のあひだ

一周忌

山茶萸のふゝめるまゝの冬の枝 傾ける 土の
霜はとけたり

山茶萸の 春のさかりはいまだ遠し。母います
土を偲びて居らむ

冬木原

梢^{ウレ}高き^{クダキ}櫛^シが原に、朝日さし、仰げは目につく。
山藪^{ヤマノ}のから

森の木ほつ枝にのこる山藪のから ひとり
すべなき心を持てり

黙^{モク}ゆく心たへがたし。下向きて その孔見ゆれ。
山藪^{ヤマノ}のから

まだ暮れぬ檜^ヒ原^{ハラ}をゆする風のおと、あゆみをと
めて、ひとりと知れり

風の音は 暮れしに似たる檜原のなか。梢を見
れば、まだあかりあり

枯れ茅の 見おろし遠きどてのもと 穴に吸は
るゝ 水の音すも

かれ茅のなづさふ川の雪消の水 青みふかくし
て、上^ウにごりをり

朝來たり ふたゝびとほる雪のうへに、鳥の足
がた みだれてありけり

檜原の うしろにさがる丘根ツネの側面ツラ。斑雪ハダレの色
は、いまだもくれず

宵の間のツえはゆるべる夜のくだち 雨ふるら
しも。雪道のうへに

きさらぎの朝間の照りに、霜けふる 茅枯れ原
の臥しみだれはも

枯 山

枯山カヤマの梢 さやく雪散りて、こがらし吹きた
つ。山の窪みに

から山の木むらに向きて吐く息を ひとりさび
しめり。深く入り來て

冬山の木原コハラの霜の見わたしに、おのづからひら
く。いきどほる胸

霜とくる冬草の葉の濡れ色の
目に入りきたる。
心なごみに

春
隣

草の株まじりて黒き冬畑の
畝はぬ土は、霜に
ふくれたり

正月、梧平に寄す

よべいねし部屋にさめたる
あかつきの目に揺
れてゐる 牀の山藨ヤマカサ

さ夜深く醒めて驚く。こは早も
年變りぬる時
計のひゞき

子どもあまた育つる家に
子らい寝て、親は起
き居り。春のいそぎに

いとけなき太郎男の子の、肩はりて横座キに坐る
を 笑み瞻マモる親

仲子ナカゴと 末の女メの子コの赤ら頬に、つきをかしも
よ。おしろいの色

三人子の母となりて、友の妻 つまさびゐるも。
春立てる家に

朝 山

おのづから まなこは開く。朝日さし 去年の
まゝなる部屋のもなかに

猿曳きを宿によび入れて、年の朝 のどかに瞻マモ
る。猿のをどりを

遠き代の安倍アベの童子ドウジのふるごとを 猿はをどれ
り。年のはじめに

目の下の冬木の中の村の道　行く人はなし。鴉
おりゐる

麥の原フの上にひろがる青空を　こは　雁わたる。
元日の朝

元日は　悠々ウツク暮れて、ふゆ草の原　まどかに沈
む赤き日のおも

故モトつびと　山に葛掘り、む月たつ今朝を入るら
む。深き林に

大正七年

——五十六首——

金富町

この家の針子は いち日笑ひ居り。こがらしゆ
する障子のなかに

晝さめて こたつに聞けば、まだやめず。弟子
をたしなむる家刀自トのこゑ

馴れつゝも わびしくありけり。家刀自ト 喰は
する飯を三年はみつゝ

はじめより 軋みゆすれしこの二階 風の夜ね
 むる静ごゝろかも

雇はれ来て、やがて死にゆく小むすめの命をも
 見し。これの二階に

お 花

高梨の家のお花が死んだのは、ちぶす
 でだった。年は十三であつたと思ふ。

したに坐^キて もの言ふすべを知りそめて、よき
 小をんなとなりにしものを

朝々に 火を持ち來り、炭つけるをさなきそぶ
 り 牀よりぞ見し

よろこびて 消毒を受く。これのみが、わがす
 ることぞ。うなゐ子のため

村の子

笹の葉を喰みつゝ 口に泡はけり。愛アハしき馬や。
馬になれる子や

麦芽たつ丘べの村の土ぼこりに 子どもだく踏
む。馬のまねして

雪

さ夜なかに 覺めておどろく。夜はの雪 ふり
うづむとも 人は知らじな

ひそやかに あゆみをとどむ。夜はの雪踏み行
くわれと 人知らめやも

鴉なくお濱離宮の松のうれ つらく 白き 雪
のふりはも

足柄の小峰コミネの原に、晝の雪淡アワらにふりて、雀出
てゐる

松むらに、吹雪けぶれる丘のうへ 閑院さまの
藁の屋根 見ゆ

堀の内

藪そとの石橋に出て、道ひろし。夕さどめきて
人つゞき来る

端山

やどり木の、枯れて繁シみ立つ谷の櫛カシ 梢見かけ
て、なぞへ急キなり

谷ごしに、黒く填ウツる松山や、青嶺アヲネの斑雪ハハレ。夕日
かどやく

級シナ島ボの 柑子カンジの山に残る雪。あかり身にしむ。

春の 日の入り

まさ青^ヲに ゆふべなだるゝ草原。この峰^ヲのあ
かりきえはてにけり

日のゝちの 明り久しき岨^{ソノミチ}道に、そよぎをぐら
し。柑子の葉むら

峰^{ツタ}亘す崖^ホ路^キのはだれは、草かげの昏れての後ぞ、
目に互え來る

ひた落ちに、丘^ヲ根^ホはさがれり。夕深き眼のくだ
り 雪の色見ゆ

峰^ヲの上には、さ夜風おこる木のとよみ。たばこ
火あかり 人くんだり來も

奥山の櫓が原ゆ立つ鳥の 一羽のあとは、立つ
鳥もなし

大つごもり

この霜にいで來ることか。大みそか 砂風かぶ
る。阪のかしらに

乾^{カラ}鮭^{サケ}のさがり しみゝに暗き軒 錢よみわたし、
大みそかなる

病む母も、明日は雜^ザ煮^ニの座になほる 下^シゑまし
さに、臥^{*}ておはすらむ

この部屋に、日ねもすあたる日の光り 大つご
もりを、とすれば まどろむ

屋向ひの岩崎の門に、大かど松たつるさわぎを
見おろす。われは

鱈の魚 おもく持ちて來る女の、片手の菊は、
雨に濡れたり

除夜

年の夜の雲吹きおろす風のおと。二たび出で行く。砂捲く町へ

年の夜の阪のゝぼりに 見るものは、心やすらふ大櫛カシのかけ

年の夜ヨル あたひ乏しきもの買ひて、銀座の街をおされつゝ来る

戻り来て、あか／＼照れる電燈のもと。寝てる顔に、もの言ひにけり

第一高等学校の生徒来て 挨拶をしたり。年の夜ふかく

槐の實 まだ落ちずあることを知る。大歳オホトシの夜月ツキはふけにけるかも

髪ケ髭ヒゲ顯ハつ。速吸ハヤスイの門カドの波の色。年の夜をすわる壘イサのうへに

年玉はもてあそび物めきて見ゆ。机に並べ、
すべながりつゝ

金太郎よ 起きねと 夜はによびたれば、湯に
や行かすと ねむりつゝ聞けり

人こぞる湯ぶねの上のがすの燈を 年かはる時
と 瞻りつゝ居り

湯のそとに、はなしつゝ洗ふ人の聲 げに 事
多き年なりしかも

五錢が花を求めて 歸るなり、年の夜 霜のお
りの盛りに

わが部屋に、時計の夜はの響きはも。大つごも
りの湯より戻れば

年の夜は 明くる近きに、水仙の立ちのすがた
をつくるひゐるも

年の夜を寝むと言ひつゝ 火をいけるこたつは、
灰のしとりしるしも

年の夜の明くる待ちつゝ 久しさよ。こもぐ
起きて、こたつを掘るも

臥て後も しばし起きぬる 年の夜のしづまる
街を、自動車來たる

しづまれる街のはてより、風のおと 起ると思
ひつゝ、うつゝなくなれり

だうろく神まつり

乾^カ風の 砂捲く道に日は洩れて、 睦月八^ヤ日の空
片ぐもる

磯近き冬田に群れて 鳥鳴けり。 見つゝ 聞き
つゝ 道ゆく。 われは

道なかに、御幣^{ミタマ}の齋^イ申^シたちそゝり、この村深く
太鼓とゞろく

七ぐさの 今日イマは明くる日。里なかのわらべに
問へば、道ミチ饗へに行く

もの忘れをして 我は居にけり。夫ウツト婦メノ神カミも、目
を見あひつゝ 笑ウツみ居たまへり

村の子は、女メ夫ウツのくなどの 肩カド擁ユきています心
を よく知りにけり

供へ物 五厘が鹽を買ひにけり。こゝの道ミチ祖ソを
はやさむ。われも

大正六年 — 百十二首 —

霜

窓の外は、ありあけ月夜。おぼゝしき夜空をわたる雁のつらあり

おのづから 覚め來る夢か。汽車のなかに、夜ふかく知りぬ。美濃路に入るを

47
陸橋の 伸しかぶされる停車場の 夜ふけ久しく、
汽車とまり居り

眉間に、いまはのなやみ顯ち來たる 母が命を
死なせじとすも

死にたまふ母の病ひに趨くと ゐやまひふかし。
汽車のとよみに

汽車はしる 闇夜にしるき霜の照り。この冷け
さに、人は死なじも

汽車の燈は、片あかりをり。をぐらき顔うつれ
る臆に、夜深く對へり

臆の外は 師走八日の朝の霜。この夜のねぶり
難かりしかも

汽車に明けて、野山の霜の朝けぶり すがしき
今朝を 母死なめやも

病む母の心 おろかになりぬらし。わが名を呼
べり。幼名によび

いわけなき母をいさむるみとり女の 訛り語り
の 悪しくあり

山および海

速^{ハヤ}吸^ヒの門^トなかに、ひとつ逢^アふものに
くれなゐ丸^マの 艦^セじるし見^ミゆ

道の邊^ヘの廣^{ヒロ}葉^ハの蔓^{マヅ} けさやかに、日の入りの後^{ノチ}
の土^{ツチ}あかりはも

汽車の窓^{マダ} こゝにし迫^{オソ}る小松山 峰^{ミネ}の上^ノの聳^ソり
はるけくし見^ミゆ

夕^タ開^クけて 山^{ヤマ}まさ青^{アヲ}なり。 肥^ヒ後^ノの奥^ヲ 人^{ヒト}吉^{キチ}の町^{チヨウ}
に、燈^{トウ}の つらなめる

温^ユ泉^{セン}の上に、煙^ケかゝれる栢^{ツギ}の枝^エ。 空^{ソラ}にみだるゝ
赤^{アカ}とんぼかも

遠^{トホ}き道^{ミチ}したにもちつゝ、はたごの部屋^ヘ あした
のどかに、飯^{イヒ}くひをはる

この町^{チヨウ}に たゞ一人^{ヒト}のみ知る人^{ヒト}の 彼^{カノ}も見た^ミたて
ぬ 船^{フネ}場^バを歩^アく

熊野

朝海の波のくづれに、あるく鴉。こゝの岸より
行くわれあるを

鳥の鳴く朝山のぼり、わたつみのみなぎらふ光
りに、頭をゆする

朝の間の草原クサツのいきれ。疲れゆく 我ワを誰知ら
む。熊野の道に

朝あつき村を來はなれ、道なかに、汗をふきつ
ゝものゝさびしさ

濱名

晝あつき家にこもれば、濱風のまさごはあが
る。竹の簀の子に

夕かげのまほなるものか。をちかたに 洲崎
の沙の、静まれる色

夾竹桃

さめぐと 今朝は霧ふる夾竹桃。片枝の荒れ
に、花はあかるき

群花ムラバナの垂り著シルけれど、まともには、色おとろへ
ず。夾竹桃の花

わが庭に、夾竹桃はしなえたり。ほこりをあび
て、町より戻る

夕かけの庭のおくかの 隈深く片あかりして
夾竹桃はある

たまぐに目屬ツりやすらふ。いぶせさは、夾竹
桃の花にさだまり

古がめに一枝をりさし はれぐし。庭にも
内にも、夾竹桃の花

提燈のあかりのゝぼる闇の空 そこに さわめ
く 夾竹桃の花

片枝のすがれは、まほにあらはに見ゆ。目だ
まりに照る。夾竹桃のはな

十月十二日、もとの生徒の、自殺
した噂を聞く、

血あえたる汝がむくろを、いぬじもの道にす
てつゝ、人そしりけり

左千夫翁五年忌

水むけの茶碗の湛へ、揺れしるし。備れる墓の
ぬしと、なりませり

吹きとほる風のそよめき、線香は、ほむら立ち
來も。卒都婆のまへに

包み紙の赤きが濡れて、塚のうへにくゆり久し
も。線香のたば

さかりぬし松葉牡丹　へりにけり。み墓さやか
になりにて　寂し

たゞひと言　ほめくれたりと思ふ翁ヲテがことば
うやくしけれど、思ひ出でず。今は

おくれ来て　寺の廣間にとほる茂吉　あつさ暑
さと　扇ならずも

大川のさつきの水の濁り波。秀ホがしら光る。そ
のくづれ波

夏　相　聞

ま晝の照りきはまりに　白む日の、大地あかる
く　月夜のごとし

ま晝の照りみなぎらふ道なかに、ひそかに　會
ひて、いきづき瞻マモる

青ぞらは、暫時曇る。軒ふかくこもらふ人の
息のかそけさ

はるけく わかれ來にけり。ま晝日の照りしむ
街に、顯グつおもかけ

ま晝日のかゞやく道に立つほこり 羅紗のざう
りの、目にいちじるし

街のはて 一樹の立ちのうちけぶり、遠目ゆる
かり 川あるらしも

「ゆかり」木の名。

目の下に おしなみ光る町の屋根。こゝに、ひ
とり わかれ來にけり

鑽 仰 庵

うつり來て 麥原ムギノ廣原 たゞなかに、夜もすが
ら 燭カす庵なりけり

豊多摩の麥原のなかに、さ夜深く覺めてしはぶ
く。ともし火のもと

こよひ早 夜なか過ぐらし。東京の 空のあか
りは薄れたりけり

長き日の黙トクの久しさ 堪へ来つゝ、このさ夜な
かに、一人もの言ふ

十方の蟲 こぞり来る聲聞ゆ。野に、ひとつ燈
を守るは くるしゑ

更けて戻る夜戸のたどりに 觸りつれば、いち
じゆくチの乳は、ふくらみたりけり

梅雨ふかく今はなりぬれ、 暫時イサトの照りのあかり
を いみじがり居る

刈りしほの麥の穂あかり昏クれぬれど、いよゝさ
やけく 蛙子カヘルゴは鳴く

刈りしほの麥原のなかは 晝ヒルの如ゴト明り残りて
蛙鳴きゐる

二三人 汽車おり來つる高聲の こゝにし響く。
おし照る月夜

さ夜霽ハルれのさみだれ空の底あかり。沼田の濱ハマに、
螢はすだく

曉^{アケ}近き穠田の畦^{ヅメ}の 列^{ツラナ}並みに 螢はおきて、火
をともしをり

さみだれの夜ふけて敲く 誰ならむ。 まらうど
ならば、明日來りたまへ

さ夜風のとよみのなかに、 窓の火の消えで残れ
る たふとくありけり

鼠子の一夜のあれに 寝そびれて、 曉はやく起
きて、飯^{イヒ}たく

めうくくと あな うまくさき湯氣ふきて、 朝^{アサ}
餉^ケ白飯^{シライヒ} 熟^{ツク}みにけるかも

くりやべのしづけき夜らのさびしもよ。 よべの
鼠の こよひはあれず

ゆふあへの胡瓜もみ瓜 醋^スにひで、 まだしき
味を 喜びまほる

朝の森暮の森

耳もとの鳥の羽ぶきに、森深き朝の歩みをと
 ぐめたりけり

むしあつき昨夜ひと夜さに 生れいで、朝森
 とよめ 初蟬はなく

朝森の砂地に 長くうごもれる鼯鼠モグラの道は、
 土新らしも

かの森の雑木のうら葉 さわだちに、照りみだ
 りつゝ 風つフのり行く

夕やけの空のあかりに ほのぐらく 枝はゆれ
 ゐる 向つ峰ツの松

森の葉のをぐらきそよぎ あまた夜を こゝに
 は聞きつ。家さかりをり

野あるき

白じろと 經木眞田を編みためて、うつゝなき
かも。草の上ウエのをとめ

道なかの庚申塚に穂麥さし、わが來て去ると、
誰知るらめや

草の藪深く入り立ち、火をもやす男もだせり。
さびしともなく

桑

桑の畑 若枝のもろ葉うちゆすり、とほり照り
つゝ 光りしづけし

さ芽だちのみどりのいろひ にほはしき桑の若
枝は 塵かうむれり

うちわたす窪田のなだれ ひとゝころ。桑の若
枝の、日にかゞやけり

吹きとよむ桑の中路の向ひ風 眩はしもよ。若
葉の光り

荒 蕪

草のなか 光りさだまるきんぼうげ。いちじる
しもな。花 群れゆらぐ

きんぼうげ さわだつ花はほのかなれど、たゞ
こゝもとに、ま晝日は照る

きんぼうげ、むらく 黄なり。風のむた その
花ゆらぐ。いろひ かげろひ

草かげに、九品佛はいましつれ。現しくゆれて、
きんぼうげの花

麥 畑

かどやかに 穂並みゆすれて、吹きとほる 麥
原の底の風はほとれり

麥の原フの穂だち はるけくおしなみに、照り白
む日は 光りしづめり

黒土の畝に、穂立ちのひたさ青フに 端正イックしきか
も。 麥ホ秀ホき並ぶ

麥の花 ひそかなれども、目につきて咲きゐる
暮れを 風のさびしさ

山岸に 穂麥のあかり照りかへり、あらはなる
かも。 赤松の幹

夕畑や 黒穂の立ちの まざくと をちこち
見えて さびし。 入る日の

夕かける麥原フ中道おち窪に、 踏み處ドをぐらく
日は洩り来る

草のうへに 踏みためがたきわが歩み。 はだし
になれど、 いたもすべなし

晝ぎらふ麥原めぐりて來たる音 車かたりと、
土橋にかゝる

午後二時

わが山に戻り來にけり。くりやべに、晝を鳴けるは、こほろぎならむ

ゆくりなく 目につきにけり。薔薇の後、庭木のうれのみな緑なる

わが庭のやつでの廣葉 ゆすりたち、さやかにこゝを風の過ぎゆく

いろいろのせき

うすぐらき 場すゑのよせの下座の唄。聴けば苦しゑ。その聲よきに

白じろと更けぬる よせの疊のうへ。悄然ときてすわりぬ。われは

籬風さかざかぜ砂吹き入れて、はなしかの高座のまたゝきさびしくありけり

誰一人 客はわらはぬはなしかの工タケミ さびしさ。
われも笑はず

高座にあがるすなはち 處女ふたり 扇ひらき
ぬ。 大きなる扇を

新内の語りのおとぎれ おどろけば、 座頭紫朝シテウ
目をあかすをり

「富久トミキウ」のはなしなかばに 立ちくるは、 笑ふに
堪へむ心にあらず

清志に與へたる

臥たる胸しづまりゆけば、 天さかるひなの薩摩
し さやに見え來も

告げやらば 若き心に歎かめど、 汝ナが思ひ得む
わびしさならず

しごとより疲れ歸りて、 うつゝなく我は寢れど
も、 明日さめにけり

朝鮮の教師に　ゆけと憑め来る　あぢきなきふ
みに、うごく　わが心

校　正　室

まのあたり　ま日薄れ来る　窓がらす　今はほの
めくわが手の動き

捲きたばこ　藁灰ふかくさしたれば、　夕づく部
屋に、いぶりいでつも

新橋停車場

金澤先生の、東京を去られた時

こがらしの風ぎにし後のあかるさや　ゆきとど
まらず。あすふあるとの道

いさゝめの町のあるきに、　竝み來つゝ　相知ら
なくも、　さびしかりけり

芝口の車馬のとよみの、晝たけて け近く聞ゆ。
この足もとに

高架線のぶらっとほうむ 長ながと、今日も互
えつゝ 昏るゝなりけり

汽車のまど そくにさびしく さし對ひ めを
といませて 汽車遠ざかる

大正五年 — 二十五首 —

火口原

しんとして 聲あるものか。わが脚は、明星个
嶽の草に觸り行く

靡き伏す羊齒はをれつゝ、重れる葉裏 目いた
し。霜じめる色

日だまりの山ふところに居たりけり。四方の梢
のこがらし 聞ゆ

峰ごしに 鳴く鳥居つゝ 時久し。山ふところに、日はあたり居り

足柄の金時山に 入り居りと 誰知らましや。
この草のなか

峰遠く 鳴きつゝわたる鳥の聲。なぞへを登る
影は、我がなり

這ひ松の這ひの上りや。はるぐに 目をまかせつゝ、山腹ヤマハラに居り

をちここに 棚田いとなみ、足柄の山の斜面に、
人うごく見ゆ

向つ峰ナの樵ノの梢の 霧ごもり、今はしづまる。
夕空のもと

ころぶせば 膚にさはらぬ風ありて、まのあたりなる草の穂は揺る

日の後ノチのうすあかるみに、山の湯へ 手拭さげ
て、人來たるなり

森の二時間

森ふかく 入り坐てさびし。汽笛鳴る湊の村に
さかれる心

この森の一方に はなしごゑすなり。しばらく
聴けば、女夫 草刈る

この森のなかに 誰やら寝て居ると、はなし聲
して、四五人とほる

此は 一人 童兒坐にけり。ゆくりなく 森の
うま睡ゆ さめしわが目に

まのあたり 幹疎木々の幹あまた 夕日久しく
さして居にけり

楢の木 of 乏しき葉むら かさくと 落ちず久
しみ、たそがれにつゝ

初七日

今西甚三郎のために

この家の伊豫簾スのなかに、汗かきて 酒のみを
らむ心にあらず

わが前に、ふたり立ち舞ふ をみな子の手ぶり
見まもり、いぶかしくあり

今日の日の すべなきかもよ。おもしろき手ぶ
りを見れば、心哭かれぬ

初七日のほとけを持てり。この酒に、今し
く 酔ひてあるべしや

夕かげに 呆ホれつゝ居れば、 蜩も 今は聲絶え
しづまりにけり

生き死にの悠ヒサなるものか。うつそみの人のわか
れに、目をとぢにつゝ

いろは館

夏かげの この居間に客來るなり。四方のもの
音 しづまるま晝

ま日深くこもれ家に 待ち久し。蚊は鳴き寄り
來。ほのに ま遠に

大正四年以前明治四十四年迄

——八十七首——

おほとしの日

除夜の鐘つきをさめたり。静かなる世間にひとり
我が怒る聲

大正の五年の朝となり行けど、膝もくづさず
子らをのゝしる

墓石の根府川石に水そゝぐ。師走の日かげ
たけにけるかも

どこの子のあぐらむ風ぞ。大みそか　むなしき
空の　たゞ中に鳴る

机一つ　本箱ひとつ　わが憑む　これの世のく
まど、目つぶりて居り

左千夫翁三周忌

牛の乳チのほひつきたる著る物を、胸毛あらは
に　坐キし人あはれ

あぢきなき死にをせしかと、片おひのうなるを
哭きし　その父もなし

裏だなを　背戸ゆ見とほし　夏の日の照りしづ
まりに　けどほき墓原

あわたゞしく　世はありければ、たま〜も
忘れむとする墓をとぶらふ

菟道

わが腹の、白くまどかにたわめるも、思ひすつ
べき若さにあらず

如月の雪の、かそけきわがはぎや。白き光りに
目をこらしつゝ

順禮は鉦うちすぎぬ。さびしかる世すぎも、も
のによるところある

なむあみだ、すゞろにいひてさしぐみぬ。見ま
はす木立ち、もの音もなき

ざぶぐと、をりく、水は岸をうつ。ひとりさ
びしく、麥踏みてぬむ

白じろと、たゞむき出し畝をうつ。島の男、あ
ち向きて、久し

日の光り、そびらにあびて寒く行く百姓をとこ。
ものがたりせむ

錢

たなぞこに 燦然としてうづたかき。これわ
が金と あからめもせず

道を行くかひなたゆさも こゝろよし。この
わが金の もちおもりはも

目ふたげば、くわうくとして照り來る。紫摩
黄金ワウゴンの金貨の光り

たなそこのにほひは、人に告げざらむ。金貨も
汗をかきにけるかな

海軍中尉三矢五郎氏の心を
かなしみて

わたつみの海にいでたる富津フツの崎 日ねもす
まほに霞むしづけさ

そのむくろ覓トむと わがいはど、わたなかの八
尋さひもち こたへなむかも

うろくづのうきゐる浪になづさひて ありとし
君を 人のいはすやも

家びとの消息来て

家のため博士になれと いひおこす親ある身こ
そ さびしかりけれ

我孫子

道のうへ 小高き岡に男ゐて、 なにかもの言ふ。
震ふるゆふべ

野は 晝のさえしづまりに、 雑木山 あらはに
赤き肌見せてゐる

藪原のくらきに入りて、 おのづから まなこさ
やかに 睜きにけり

心ふとものにたゆたひ、耳こらす。椿シタの下
の暗き水おと

霏ふる雑木のなかに、銚うてるいとど 女メヲト夫
の唄の かそけき

太秦寺

常磐木のみどりたゆたに、わたつみの太ウツマツ秦マツ寺テラの
晝の しづけさ

二人あることもおぼえず。しんとして いさご
のうへに 鶉一羽ゐる

おそろしき しどまなりきな。梢より、はたと
一葉は おちてけるかな

ほれぐと人にむかへば、晝遠し。寺井のくる
ま 草ふかく鳴る

まさびしくこもらふ命 草ふかき鐘の音しづみ、
行きふりにけり

鹽原

馬おひて 那須野の闇にあひし子よ。かの子は、
家に還らずあらむ

わがねむる部屋をかこめる 高山の霜をおもひ
て、燈を消しにけり

神のごと 山は晴れたり。夜もすがら おもひ
たはれし心ながらに

にはとりの踏みちらしたる芋の莖 泣きつゝと
るか。山の處女ら

朝日照る山のさびしさ。向つ峰ツに斧うつをとこ。
こちむきてゐよ

かくしつゝ、いつまでくだち行く身ぞや。那須
野のうねり 遠薄トホス、キあり

生 徒 一

夜目しろく 萩が花散る道ふめば、かの子は
母の喪にゆきにけり

生 徒 二

白玉をあやぶみ擁き 寝ざめして、春の朝けに、
日うるめる子ら

このねぬる朝けの風のこゝちよき。寝おきの
顔の ほのあかみたる

こゝちよき春のねざめのなつかしさ。片時をし
み、子らが遊べる

砂原に砂あび 腰をうづめむつ。たはぶれの手
を ふと 止めぬ。子ら

わが子らは 遊びほけたる目を過るヨキ何かおふと
て、おほゞれてをり

わが雲雀 今日はおどけず。しかすがに つゝ
ましやかにふるまひにけり

くづれふす若きけものを　なよ草の牀に見いで
て、かなしみにけり

倦みつかれ　わかきけものゝ寝むさぼる　さま
はわりなし。かすかにいびく

やせくて、若きけものゝ　わが前にほと息づき
ぬ。かなしからずや

すくくと　のびとゝのほりゆく子らに、しづ
ごゝろなき　わがさかりかも

生　徒　三

二三尺　藜のびたるくさむらの　秋をよるこび
なく蟲のあり

沓とれば、すあしにふるゝ砂原の　しめりうれ
しみ、草ぬきてをり

わが病ひ　やゝこゝろよし。なにごとかしたや
すからず　やめる子のある

生徒四

小鳥 小鳥 あたふた起^タちぬ。かたらひのはて
がたさびし。向日葵の照る

はるしや菊 心まどひにゆらぐらし。腫かゞや
く少年のむれ

かの子こそ われには似つゝものはいへ。十年
の悔いにしづむ目に来て

人の師となりて ふた月。やうく に あらた
まりゆく心 はかなし

わかやかに こゝちはなやぎあるものを。さび
しくなりぬ。子らを教へて

おろく に 涙ごゑして來つる子よ。さはなわ
びそね。われもさびしき

いくたびか うたむとあぐる鞭のした、おぢか
しこまる子を泣きにけり

阿蘇をこえて

よすがなき心 あやぶくゆられぬつ。馬車たそ
がれて、町をはなれつ

つまづきの この石にしもあひけるよ。遠のぼ
り来て、阿蘇のたむけに

盆すぎて をどりつかふる里のあり。阿蘇の山
家に、われもをどらむ

奥熊野

たびごゝろもろくなり來ぬ。志摩のはて 安^ア乘^イ
の崎に、燈^ヒの明り見ゆ

わたつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の晝
の夢と たゆたふ

闇に 聲してあはれなり。志摩の海 相^ア差^サの迫^セ
門に、盆の貝吹く

天づたふ日の昏れゆけば、わたの原 蒼茫とし
て 深き風ふく

名をしらぬ古き港へ はしけしていにけむ人の
思ほゆるかも

山めぐり 二日人見ず あるくまの蟻の孔に、
ひた見入りつゝ

二木^キの海 迫門のふなのり わたつみの入り日
の濤に、涙おとさむ

青山に、夕日片照るさびしさや 入り江の町の
まざぐと見ゆ

あかときを 散るがひそけき色なりし。志摩の
横野の 空色の花

奥牟婁の町の市日^{イチヒ}の人ごゑや 日は照りあつゝ
雨みだれ來たる

藪原に、むくげの花の咲きたるが よそ目さび
しき 夕ぐれを行く

大海にたゞにむかへる 志摩の崎 波切ナキリの村に
あひし子らはも

ちぎりあれや 山路のを草茨さきて、種とばす
ときに 來あふものかも

旅ごゝろ ものなつかしも。夜まつりをつかふ
る浦の 人出にまじる

にはかにも この日は昏れぬ。高山の崖路ホキテ 風
吹き、鶯のなく

那智に來ぬ。竹柏ナギキ 樟の古き夢 そよ ひるが
へし、風とよみ吹く

青うみにまかゞやく日や。とほぐし 妣ハハが國
べゆ 舟かへるらし

波ゆたにあそべり。牟婁の磯にゐて、たゆたふ
命 しばし息づく

わが乗るや天アマの鳥船 海ウミさかの空拍つ浪に、高
くあがれり

たま／＼に見えてさびしも。かぐろなる田會タノの
追門セトより遠きいさり火

わたつみのゆふべの波のもてあそぶ 島の荒磯アソノ
を漕ぐが さびしさ

わが帆なる。熊野の山の朝風に まぎり おし
きり、高瀬をのぼる

うす闇にいます佛の目の光 ふと わが目逢ひ、
やすくぬかづく

明治四十三年以前三十七年頃まで

——七十五首——

焚きあまし その一

竹の葉に 如月の雪ふりおぼれ、 明くる光りに
心いためり 「西也」ニ首

大空のもとにかすみで、 あかくと くれゆく
山にむかふ さびしさ

木の葉散るなかにつくりぬ。 わが夜牀^{ヨドコ} うづみ
はてねと、 目をとちて居り

かれあしに 心しばらくあつまりぬ。みぎはに
ゐつゝ ものをおもへば

ちまたびと ことばかはして行くにさへ 心ゆ
らぎは すべなきものを

〔所在なく暮した頃五首〕

夕波の 佃の島の方とへど、こたへぬ人ぞ、充
ち行きにける

さびしげに 經木眞田の帽子著て、夕河岸たど
る人よ もの言はむ

兩國の橋ゆくむれに、われに似て、後姿^{ウシロ}さびし
き人のまじれり

町をゆく心安さもさびしかり。家なる人のうれ
ひに さかる

春の日のかすめる時に、つかれたる目をやしな
ふと、若草をふむ

戸を出で、百歩に青き山を見る。日ねもす
おもひつかれたる目に

庭のくま ひそやかに鳴く蟲あるも、今あぢは
へる悔いにしたしき

ひそやかにぬればさびしも。たそがれの窓の夕
かけ 月あるに似たり

青やまの草葉のしたに、ながりし心のすゑも
みだれずあらむ

〔宮崎信三、死んだにきまつた後〕

あはれなる後^{イチ}見ゆるかも。朝宮^{イサミヤ}に、祇園をろが
む匂へる處女

〔母のつきそひに、京都大學病院にゐた頃〕

ひやゝけき朝の露原 あしにふみ、なにかえ
がたきしたごゝろやむ

京のやま。まどかにはるゝ見わたしに、なにぞ、
涙のやますながるゝ

秋の空 神樂个丘の松原の、け近く晴るゝ見つ
ゝさびしき

この道や 蹴上^{ケアゲ}の道。近江へと いやとほく
し。あひがたきかも

しづかなる晝の光りや。清水の地主チシユの花散る徑
を 來にけり

大空の鳥も あぐみて落ち來たる。廣野にをる
が、寂しくなりぬ

中學の廊のかはらのふみごゝち むかしに似つ
ゝものゝすべなさ

〔卒業後五年〕

雪ふりて昏るゝ光りの 遠じろに、小竹シメの祝ウラ部
のはかどころ見ゆ

〔紀伊國日高〕

焚きあまし その二

わがともがら 命にかへし戀ながら、年來サり行
けば、なべてかなしも

いくさ君 武田がのちに、はかなさよ。わび歌
多し。あはれ わが友

〔福吉ヒ一首〕

君にわかれ ひとりとなりて入りたてば、冬木
がもとに、涙わしりぬ

はつくさに 雪ちりかゝる 錦部の 山の入り日
に、人ふりかへる

牟婁の温泉の ところなめらなる 岩牀に、 枕す。
しばし 人をわすれむ

〔肥州錦山温泉〕

月にむき、ながき心は見もはてず わかれし人
のおとろへをおもふ

木がらしの吹く日來まます。 わがゝどの冬木が
うれの 心うく鳴る

そのかみの 心なき子も、 世を経つゝ、 涙もよ
ほすことを告げ來る

ひたすらに、 荒山みちは越えて來つ。 清きなき
さに、 身さへ死ぬべし

〔肥州由良浦〕

十年へつ。 なほよろしくは見えながら、 かの心
ひくことのはのなき

このわかれ いく世かけてはおぼつかな。 身さ
へ頼まぬ はかなさにして

〔出羽に歸り住む友に〕

あはむ日のなしとおもはず。ふみわたる茅生の
ほどろに 心たゆたふ

秋の山 なく鳥もなし。わが道は、朝けの雲に
末べこもれり

石川や 二里も 三里も、若草の堤ぬらして、
雨はれにけり

はたくと翼うち過ぐ。あはと見る まなぢは
るかに きその鳥行く

冬ぐさの堤日あたり 遠く行く旅のしばしを
人とやすらふ

萩が花はつかに白し。ひとりゐる 山のみ寺の
たそがれの庭 「西山の善峯寺」

山の石 とゞろくと落ち来る。これを前に見、
酒をたのしむ 「人に役せられて」二首

旅にゐて、さむき夜牀のくらがりに、うしろめ
たしも。いねしづむ胸

山のひだ さやかに見えて、大空に、昏れゆく
 菟道の春をさびしむ

ともしびの見ゆるをちこち 山くれて、宇治の
 瀬の音は 高まりにけり

木ぶかく蜩なきて、長岡のたそがれゆけば、親
 ぞこひしき

春雨の古貂のころも ぬれとほり、あひにし人
 の、しぬにおもほゆ

杉むらを とをゝに雪のふりうづむ ふるさと
 來れど、おもひ出もなし

明日香風 きのふや千年。やぶ原も 青菅山も
 ひるがへし吹く 〔高市郡〕三首

なつかしき故家の里の 飛鳥には、千鳥なくら
 む このゆふべかも

山原の麻生の夏麻を ひくなべに、けさの朝月
 秋とさえたり

あるひまよ。心ふとしもなごみ來ぬ。頬をたゞ
よはす 涙のなかに

天つ日の照れる岡びに ひとりゐて、ものをし
もへば、涙ぐましも

冬がれのうるし木立ちのひま／＼に 積み藁つ
ゞく 國分寺のさと

遠ながき伏し越えみちや。うらく／＼に 照れる
春日を、こしなづむかも

〔伏越地〕地名

庭の面モにかり乾す藁の 香もほのに、西日ニシヒのひ
かり あたゝかくさす

目をわたる白帆見る間に、ふと さびし。やを
ら 見かへり、目のあひにけり

をり／＼は かなしく心かたよるを、なけばゆ
たけし。天ぞ來むかふ

見ミのさびし。そともの雪の朝かげの ほのあか
るみに、人のかよへる

ねたる胸　いともやすけし。日ねもすにむかひ
し山は、わきにそゝれど

わがさかり　おとろへぬらし。月よみの夜ぞら
を見れば、涙おち來も

わが戀をちかふにたてし　天つ日の、まのあた
りにし　おとろふる　見よ

いにしへびと　あるは來逢はむ。神南備カミナヒの萩ち
る風に、山下ゆけば　「飛鳥の村」

むさし野は　ゆき行く道のはてもなし。かへれ
と言へど、遠く來にけり「朝のむにそはないて、國學院に
はひつた年の秋」二首

夕づく日　雁のゆくへをゆびざして、いなれぬ
國を　また言ふか。君

わがゝづく朽葉ごろもの袖　たわに、ゆたかに
春の雪ながれ來ぬ

いふことのすこし残ると　立ち戻り、寂しく笑
みて、いにし人はも

こちよれば、こちにとをより なづさひ來、ほ
 のに人香ヒトガの。身をつゝむ闇

車きぬ。すぐる日我により來にし。今あぢきな
 くわがゝどをゆく

おもふことしばくたがひ、おきどころなき身
 暫らく 君にひたさる

夕山路チ こよひまる寝むわがふしどの うさ思
 はする 鶯のこゑ

この里のをとめらねり來。みなづきの 夕かげ
 草の ほのくとして

おもひでの家は つぎく亡びゆく。長谷の寺
 のみ さやは なげかむ 〔天和初瀬寺炎上〕

牧に追ふ馬のかずく 何ならぬ 目うるみた
 りし後チも忘れず

ほうとつく息のしたより、槌とりて うてば、
 火の散る 馬のあし金

明治卅七年、中學の卒業試験に落第して、
その秋。

秋たけぬ。荒涼^{スベロサム}さを 戸によれば、枯れ野にお
つる 鷗^{ヒラ}のひとむれ

「大和傍丘の洪一の家にやどる」

この集のすゑに

鷗外博士の最後の文集は、確か「蛙」と言うた様に思ふ。長い愛著をふりきつて、學問に立ち戻らうと言つた語氣を、その序文に見出して、寂しきには居られなかつた。所謂とんぼう。蝶々を鳥のうちにかぞまへる態度からすれば、私なども、蛙は蛙である。其も、ほんのはかない、枝蛙である。しかも極めて、周圍に順應する事の拙い、蠢きを續けて來た。學者なかまに立ちまじると、文學者肌が目だつた。文學者の群れにゆくと、あまり著しく、自在を失う

た學究臭さが省みられた。幾たの友だちも、長い携りから手をふりもいで、私の及ばぬ遠い處にのいてしまふた。先輩の多くは、私の、道草を嗜む事の甚しきを悪んで、めんどろを見てくれなくなつて行つた。そんな中で、久しく私の上に、温かい「まもり」を續けてゐて下されたのは、故三矢重松先生である。血をおびた大きな先生の眼は、私にとつて、「かしこまり」でもあり、「やすらひ」でもあつた。併し、唯一つ私の上に臨んでゐたその温い眼も、私を見棄てるに到るほど、私は長く中道に悶えて居た。さうなる間、私の一作々々を、私の研究を見るにひとしい歡びを以て、どんなに聴き入つて下された事であつたら

う。安倍晴明とうち臥しの巫女との術くらべを中心に置いた脚本は、王朝文學研究の具體化出來たものとして、過褒を賜つた。水漬ミヅツきつゝ敵愾を諒うた「おほやまもり」の死の叙事詩の構想は、國學の窮極地だとまでの保證を、先生から受けた事であつた。

3
更に又、茂吉さん・赤彦さん等のひき廻しで、「あらゝぎ」の上に、自由に作物を發表する事の出來る様になつた時、本氣になつて喜んで下されたのは、東京では、先生が第一の人であつたに違ひない。其先生すらも、最後には、私の低回を憐み、私の歌の、その鑑賞に入り難くなつた事を憎んで、やゝ、心を文學に斷つやうに憑められる傾きになつて來

られた。

かうして、人に悪まれ、飽かれても尙、文學の結界を踏み出す事は、えせなかつた私である。其間に俄かに、一筋の白道が、水火の二河の眞中に通じて居るのを見た。柳田國男先生の歩まれた道である。私はま、しぐらに其道を駆け出した。けれども、白道を行きつゝも、二河のしづきは、しきりなく私の身にふりかゝつた。

鷗外博士は、「蛙」一部を以て、その兩棲生活のとぢめとして、文壇から韜晦した。愚かな枝蛙は、最後の目を見つめるまで、往生ぎはのわるい妄執に、ひきずられて行くことも知れない。

八九歳の頃一首。十一歳一首。ひき續いて作り出したのは、十五位からの事と思ふ。二つ年がさの兄は、當時「少年園」から「文庫」と名を易へたばかりの雑誌を読み耽つて居た。與謝野鐵幹さんが、暫らく歌の選者をして後、服部躬治先生が、替つて歌を選ばれた。此頃になつて漸く、歌に陸しみを感じかけた兄は、一足先きにある文學意識を持つた歌を作り出した。兄を凌ぐ事を爲事にして居た弟は、すぐ、その跡をつけた。けれども、僅かな年齢の差も、文學動機の飽和の度に於いて、著しく、一方には強め、一方には弱めた。私は何時も、兄にまかされて居た。子どもながら、自ら鑑賞を晦ます事の出来なかつた寂しき。で

も、競争意識の卑しさを知った私は、一方ぼつ／＼兄に學んで行く氣にもなれた。兄の投書にまぜてくれた私の一首も、抜かれて居たのを見て、天に昇る様な氣のした事もある。兄が遊學に出て後、創作動機の薄い私は、歌らしい物を作った覚えもない。そのあくる年、明治卅五年には、武田祐吉・吉村洪一・淺沼直之助・宮崎信三・岩橋小彌太・西田直二郎と詩社様のものを組んだ。律氣な武田には、たゞ、それらのを常の事として、でも、毎週間二三首・五首と作つて居た。其頃のもの、武田が保存して居てくれたが、今度の選集に、一首も採れるのはなかつた。射治先生の影響をばわるく受けた我執の姿が、どれにもこれにも、現れて

居た。其上、鐵幹さん風の、發想を拗らすよみぶりまでも、小賢しくうつして居た痕が見出される。新詩社に對する反感は、既に激しく心に動いて居たに拘らず、歌の上には、其印象らしいものが、今日からは紛れなく見えすいて居る。

卒業試験に、劣等生としてふり残された私は、とり集めた寂しさを知った。感傷にあまえもし、うち贏ちもした。焚きあまし「その一」・「その二」は、年の順序に並べられなかつた利、製作時の印象の乏しい即興歌が多い。國學院大學に學生として、氣ずるな生活をして居た間のもものは、殆ど實生活を無視し、實感を疎外した歌ばかりである。四十二年に卒業して、翌年秋、大阪府今宮中學校教員となるま

での一年あまりを、家に居て、所在ない日を送った。その間に、大阪根岸短歌會の集りに加つて、安江不空さん・花田比露思さん・外山家人さん等から、今まで思ひ及ばなかつた、靜かに、澄んだ境涯のある事を見知らされた。根岸派の會には、東京をひき拂ふまへ、二度、子規庵での歌會に出て、晩年の左千夫先生も見、若い茂吉・千樫・純・文明の方々の顔をも、記憶してゐる。

その頃、東西の根岸のよりあひに、いつも、第一に出された當座の題は、「席上即景」であつた。此が非常に、私に影響した。併し、鈍根の上に我に執し勝ちの私には、其が急には、効果を顯さなかつた。早い話が、子規庵の「當座」に、

杉垣の隣のへだて　　上^ウじろみ、夜目ひやゝけし。
月の夜の霜

當時非常に若かつた文明さんが、激賞してくれた。それで、其時の幼稚な感謝と、好意とを、後年まで、同氏にむかつて持ちつゞけた事だ。が、此歌は實感を逸した形ばかりのものである。根岸派の寫生を表面學びながら、實相に迫らないで、軽い詠歎に逃げてゐる。語の綾で美を盛り立てよう、としてゐる。歌に出て居る文法意識は、躬治風であり、修辭法は、前明星末期の姿である。だが、かう言ふ間に、次第に腹の据ゑどころが、段々きまつて行つたのも、事實である。

態度としては、全體に認めて居ない物の、部分の價値に囚はれると言ふ事は、學問文學をふり分けにした蛙の、常に負ふところの罰である。萬葉研究に一生をつかひ果した木村正辭先生の歌が、極めて低調な「おとつ代ぶり」である事を罵りながら、私自身やつぱり、部分的に古今を認め、金葉・詞花を認め、新古今を容れ、玉葉・風雅を許してゐたのである。ひたみち萬葉に進む人々よりは、誘惑や困憊を、多く凌がねばならぬ訣である。私の歌の、年久くして、尙且、此位の「ゆきあし」を示してゐるに過ぎないのは、甘受せねばならぬ應報であつた。

大正三年の春、二年半をしへた生徒たちを卒業させたの

をキツシヨ吉祥に、私は職を罷めて、東京に來た。教へた生徒十人ばかりと、本郷赤門前の下宿の三階に住んだ。大正四年秋には、歸國せなければならぬほどに窮しんだ。が、とうとう東京に留りをふせた。小石川金富町のお針屋の二階の六疊に移つて居た金太郎の處に、いつ時と思つてかゝり人となつたのが、三年の間も其まゝで、居なりに居た。十餘人の生徒の中、私の近まはりに残つた者は、高等工業學校に通うた金太郎と、近所にたよつて來て、高等學校入學試験の用意をしてゐた清志と、前年第一高等學校にはひつた雄祐とになつてしまつた。でも、後から後から私をたよつて來た生徒たちが、三四人は居たが、皆それ／＼

の方角が開けて、あちこちへ散らばった。

自分では、さまでにも思はなかつたが、やっぱり「身は境涯（まゝ）に
伴（た）れる」と見えて、敏感な清志から、私の動作の、以前の
「なごやかさ」を失うた事を指摘せられた事も、幾度があつ
た。不自由を知らずに育つた金太郎も、私と一つ處に住
む爲に、共に苦しいめを見る様な事があつた。其でも、黙
々と私のあるく道を、専門こそ違へ、ついて来てくれた。
五年の夏、清志を、強ひて鹿兒島の造士館に入らせて後は、
金太郎一人を、話相手にしてくらしした。

「あらゝぎ」にはひつたのは、この年であつた。赤彦さんが
富阪のいろは館に居た都合から、しげく、と出入りをし

た。其間に、「あらゝぎ」の同人の方々から、數へきれない程
よい影響をうけた。

けれども、かうした實生活から來るものを、歌に表さうと
して、認識の熟せないうちに、表現不足のまゝではふり出
す事が多かつた。今見ても、さもしい氣のする歌が限り
なく出來た。しかも、此集にさう言ふ歌を、すつかり刪つ
てしまふ事の出來なかつた執著が恥かしい。

推敲に迷ふ事があると、赤彦さんの處に馳けつけた。赤
彦さんが、「こゝはかう。そこはあゝ」と言ふ風に、決斷して
くれると、安心した。「あらゝぎ」同人の中、殊に赤彦さんの
おかげを蒙つて居る事は、とりわけ書いて置かねばなら

他の同人の方々にも、此際長らくの厚誼を謝して、一本づゝを獻じたいと思ふ。

かうして、幸福な歌人としての生活を續けて居るうちに、ゆくりない機縁が、「あらゝぎ」を遠のく方へ私を導いた。さうして再、文學の上では相談相手のない、ひとりぼち、に還つた。けれども、長い「あらゝぎ」生活の間に、やゝ腰もきまつて來た。これからだ、と言ふ氣がする。しかし考へて見ると、寂しくなる。わたしの文學は畢竟、枝蛙の藝道である。どこまで行きとほす事が出来るか、又かうした歌集も、も一度出す心持ちになる時が来るか、どうか。恥

かしながら、私には、さうした「かね言」をする元氣がない。今度、此集をつくるにも、おほよそは、金太郎一人の努力に任せきつて居た。私はたゞその中から、出来るだけ多く刪つたゞけである。巖にしがみついて居る鱈貝をひつべがす様にして、それでも、若い頃の作物の十の九までは棄てゝしまつた。さうして残つた中にも、なほして出さねば、目のあてられないものが、尙多かつた。併し、あまり時のかげ離れ過ぎたものは、今のいきかたから見れば、寧ろ作りかへても、物にはならぬのである。だから、さうした古い部分のものには、出来るだけ目を塞いで、手を入れずに置いた。わりあひに今の心もちにはひつて居る近

年の分だけは、自由にしてもよいと言ふ考へから、直して見たものも、可なりにある。

こんなにしてまで、實は、古い頃無反省の口拍子で出来た様な歌を、保存する必要はないのである。純な文藝の動機からしては、勿論意味のない事である。けれども、私人の歌心の展開を示すのには、少しは役に立つかと思ふ。もとく、私如きの歌に、さう言ふ試みをする事々體コトツダイが、まぢがひの様な氣もするのだが、其にも一つの口實が伴うて居た。

眞實私ほど、他人の影響を受けたものは少からうと思ふ。此海月の様な歌心の漂ひまはつた濔のあとを見れば、自

ら、所謂新派和歌の變遷の姿が見えるのである。古い處では、躬治先生の口まねがはつきり見えるし、やゝ進んで子規居士のひょうげた側ばかりを學んだところも残つて居る。鐵幹さんに對する反感が却て、其技巧に近づけた様などころも、十分に見える。だから、根岸派の人々の中、此點から見れば、私は蝙蝠の様な形をとつて居る。其次に來たのは、千桎さんの若い時代の、しなやかな抒情の境地であつた。赤彦さんの「馬鈴薯の花」時代の歌も、此意味から、ある時期の私の養ひになつた事を覺えて居る。茂吉さんとはあまりに性格が違ひすぎてゐる爲か、其印象は近年にぼつ／＼見えて、以前には、ちつとも出て來な

い。「見のかなし……」と言ふ變な歌を「焚きあまし」に容れたのは、此一首、確かにまだ中學生であつた頃の文明さんの墓場の蓬の歌から、來て居る事を示したかつたのである。啄木の影響は、考へて見ると、非常なものであつた。形の上ではさもない様に見えるか知らぬが、私自身の發想法に翻譯して表して居たのである。生活など言ふ側には、目をつぶり勝ちな私が、歌では、可なりさうしたものゝ出てゐるのは、やつぱり、それなのである。同じ生活派でも、善磨さんのは、あまりな特殊と特殊との對立から、かぶれ様がなかつた様に思ふ。而も、私自身も近年始めた新形式の歌には、同氏の影がさして來た様な氣がしてならぬ。

此人と言ひ、勇さんといひ、歌の上に印象の少いのは、育つた都會の氣持ちに、相容れぬところがあるからと思ふ。私は、大阪で成人した。それで、かう言ふ、形といひ、心の入れ方と言ひ、ねぼり強くあくぬけのせぬものになつたのである。白秋さんの影響も、「雪」「荒蕪」などには、十分見えて居る。

かうして、自身をいためつけて見ると、殆どどこに、自身があるのだからわからない。「かうして居るおれは、だれか知ら」とは、なしかがよくする、粗忽者の話のさげに似た感じが深くする。それで居てやつぱり、人から見れば、私ひとり違ひ過ぎて居る様に思はれよう。併し其は、おもに「こと

ば「や」すがた」の上から来るものである。私はもつと本領がありさうな氣がする。やつぱり前に言つた「これから」である。だが、「これから」がいつまでも「これから」でありさうな、心細い氣もする。

私の歌を見ていたゞいて、第一に、かはつた感じのしようと思ふのは、句讀法の上にあるだらう。私の友だちはみな、つまらない努力だ。そんなにして、やつと訣る様な歌なら、技巧が不完全なのだと言ふ。けれども此點では、私は、極めて不遜である。私が、歌にきれ目を入れる事は、そんな事の爲ばかりではない。文字に表される文學としては、當然とるべき形式として、皆で試みなければならぬ

事を、人々が怠つて居るだけなのである。短冊・色紙にはしり書きするのと、活字にするのとは別である。だらしない昔の優美をそのままゝついで、自身の呼吸や、思想の休止點を示す、必要を感じないのんきな心を持つて居て貰うては「困る」。そればかりか、かうした試みを、軽い意味に考へ易いのは、文字表示法に對して、あまり恥しいなげやリではないか。技巧に専念であればあるほど、字面の感じにまで敏感になる。漢字と假名との配合や、字畫の感觸などにまで心を使ふのは、寧ろ誇るべき事である。しかも其よりも、一層内在して居る拍子を示すのに、出来るだけ骨を折る事が、なぜ問題にもならないのであらう。

こんな點などでは、全く立場を異にして居ながらも、善麻呂さんのやつて居るろうま字書きの歌や、譯詩などの方が、正しい道を目がけてゐるものと思ふ。「わかれば、句讀はいらない」など、考へてゐるのは、國語表示法は素より、自己表現の爲に悲しまねばならぬ。

それに又、私の、かうしたじれつたい・めんどろな爲事にいたつく理由が、も一つあるのである。其は、歌の様式の固定を、自由な推移に導く豫期から出てゐる。五七五七七の形を基準にして、書きもし、讀み下しもする爲に、自然の拍子は既に變つて居ても、やはり、句跨りと思ひ、讀んだり、感じたりして居る。これは表示法から來る讀み方

の固定なのである。私どもはどうしても、これだけは、われわれの時代の協力によつて救ひ出さなければならぬ。歌の生命の爲である。われわれの愛執を持つ詩形の、自在なる發生の爲である。

私は、地震直後のすさみきつた心で、町々を行きながら、滑らかな拍子に寄せられない感動を表すものとしての出来るだけ、歌に近い形を持ちながら、一歌の行きつくべきものを考へた。さうして、四句詩形を以てする發想に考へた。併しそれとても、成心を加へ過ぎて、自在を缺いてゐる。私は、かうして、いろ／＼な休止點を表示してゐる中に、自然に、次の詩形の、短歌から生れて來るのを、易く

見出す事が出来相に思うてゐる。私は、今も迷うてゐる。これをはじめてから、十年位にはなる。しかも、思想の休止と、調子の休止と、いづれを主にしてよいか、それさへまだ、徹底しきつては居ない。けれども、一人の努力よりは、多人数の協同作業が、自然にある道筋を開くべきものと信じて、一人でも多くのなかまの出来るのを待つ爲に、功利風に考へる人からは、むだと思はれるはずの爲事をつゞけてゐる。しかしこの點は、私が自身の歌に「おぼつかなさ」を持つて居る様なものではない。いつかは實現の出来、さうして、古典としての歌から、自在な詩形の生れて来る事が、信ぜられてならないのである。

こんな事に力を入れるのも、或は枝蛙なるが故のことかも知れない。けれども、蛙なるが故に、思ひ捐てる事の出事ぬ、日本の詩形の運命なのである。

宮廷詩なる大歌系統の詩形が、三十一字に固定して來た間に、小唄即民謡は、限らない變化と、自在なる展開を経て來たのであつた。ほとんど、民族文學唯一の形式とも思はれて來た短歌が、生活の拍子にそぐはなくなつたのは、單に、近代の事ではない。もう、ほんとうの様式、求心的な發想を持つものが、歌から生れて來てよいはずである。われゝの内側の拍子には、遠心的な俳句や、「詩」に任せきれないものが、永久にあると思ふ。

皆さん。私の焦慮を察して、この企てに、と申してお氣に
めさぬなら、どうか、次の時代の實現の爲に、お力をお貸し
下さい。

久邇ノ宮さまにかよふ自動車、
しつきりなく家ゆする日

釋 迢 空

大正十四年五月廿五日印刷
大正十四年五月三十日發行

海々まのあひだ

定價一圓八十錢



著者 折口信夫
發行所 山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者 石川金太郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發 兌

改

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
電話 東京 四九四九三番
高輪 四九三番
社

株式會社秀英舎印刷所

自 選 歌 集					
木下利玄著	折口信夫著	中村憲吉著	古泉千樞著	島木赤彦著	齊藤茂吉著
立	海	松	川	十	朝
	や	の	の		の
	ま		ほ		
	の		と		
	あ	芽	り	年	螢
	ひ				
春	だ				
送料	定 價	送料	定 價	送料	定 價
・二八	一・八〇	・二八	一・八〇	・二八	一・五〇
					・二八

